

# 開発こうほう

Hokkaido Development Association

共に北海道の未来を創る

May.2026  
5月号

北海道新時代

**防災・減災シンポジウムin留萌  
データの活用と情報共有に向けて**

研究概要

**令和8年度の開発調査総合研究所の活動について**

シリーズ 北海道の博物館・郷土資料館

**団体移住により拓かれた由緒あるまちの歴史を学ぶ**

地方創生

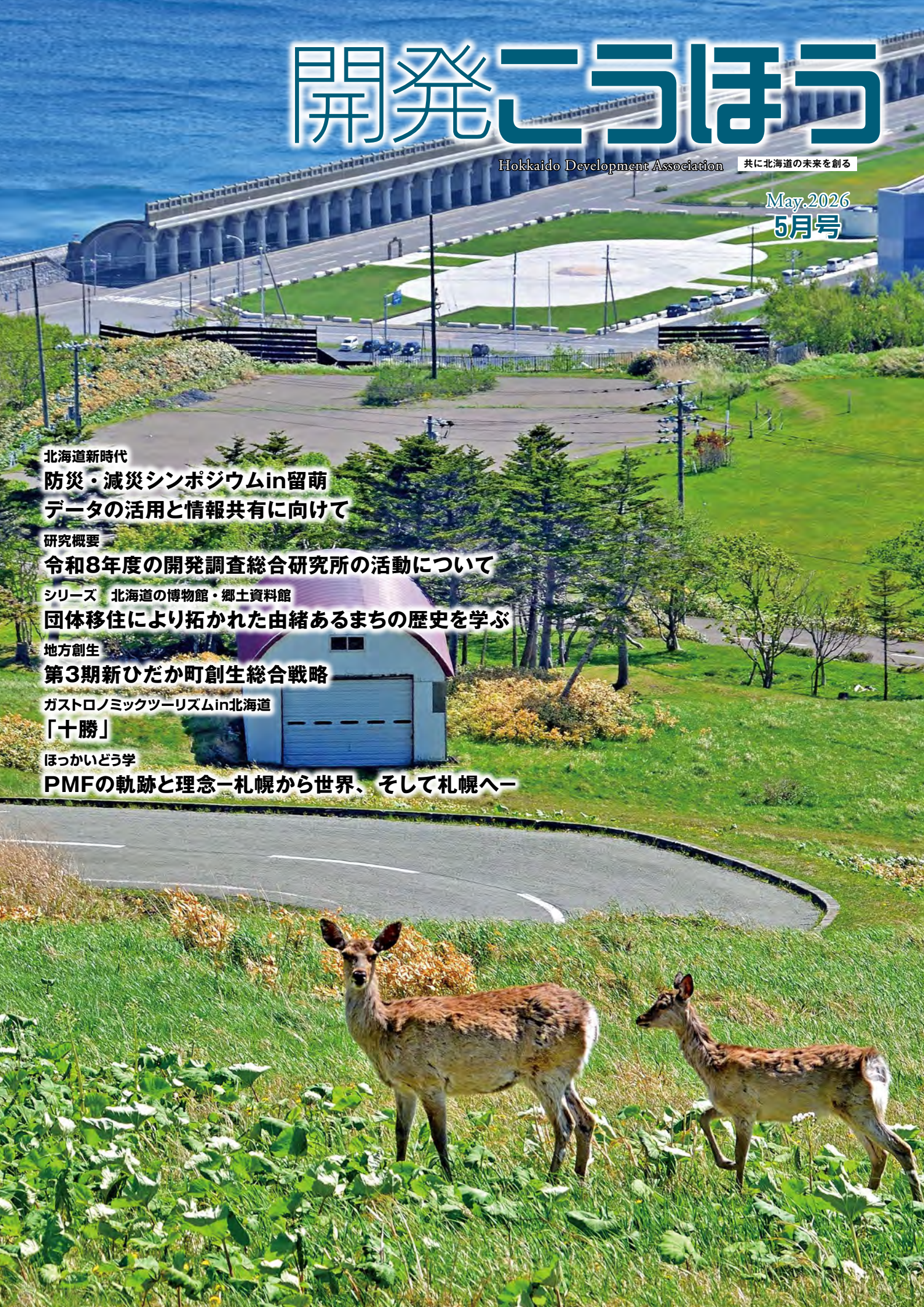
**第3期新ひだか町創生総合戦略**

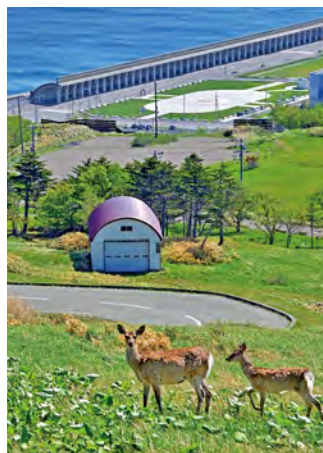
ガストロノミックツーリズムin北海道

**「十勝」**

ほっかいどう学

**PMFの軌跡と理念—札幌から世界、そして札幌へ—**





『ドームを見下ろす場所で』（『北海道遺産フォト&短歌チャレンジ2024』 入選作品）  
撮影者 上杉 裕昭 様  
北海道遺産 「稚内港北防波堤ドーム」

稚内おおぞり一樺太大泊間の旧稚泊航路整備の一環として、冬季の北西越波防止のために建設された半アーチ式ドーム。海上からの高さ14m、柱間6mの円柱70本を並べた長さ427mの世界でも類を見ない独特の景観と構造を持ち、港湾土木史に残る傑作であるとともに、旧樺太航路時代の記憶を残す歴史的遺産。設計者は、当時26歳の土木技師・土谷実。

## Contents

### 北海道新時代①

防災・減災シンポジウムin留萌  
～災害に強くしなやかな社会づくり～ ..... 1  
国土交通省北海道開発局事業振興部防災課

### 北海道新時代②

データの活用と情報共有に向けて  
～第6回北海道ドライブ観光促進プラットフォーム会合～ ..... 7  
国土交通省北海道開発局開発監理部開発連携推進課

### 研究概要

令和8年度の開発調査総合研究所の活動について ..... 10  
(一財)北海道開発協会開発調査総合研究所

### 開発調査総合研究所 シリーズ 北海道の博物館・郷土資料館《2》

団体移住により拓かれた由緒あるまちの歴史を学ぶ  
新十津川町開拓記念館 ..... 14  
加藤 和仁

### 地方創生

第3期新ひだか町創生総合戦略 ..... 16  
新ひだか町総務部企画課

### ガストロノミックツーリズムin北海道

～食と文化の観点から地域を見つめ、北海道を学ぶ旅～ 第9話  
「十勝」 ..... 20  
遊佐 順和

### 「ほっかいどう学」第54回

PMFの軌跡と理念  
～札幌から世界、そして札幌へ～ ..... 24  
桑原 辰徳

### インタビュー 飛翔のレシピ 39 -八雲町-

観光をフックに『一度きりで終わらない関係人口設計』を  
藤谷 周平 ..... 28  
かとう けいこ

### 地域おこし協力隊 第56回 -幕別町-

空き家を活用した地域おこし ..... 30  
岡田 大介

### 「活動報告レポート」-札幌市-

北海道市民ファシリテータープラットフォームの取組み ..... 32  
NPO法人きたのわ

### 海外レポート 第44回

ザンビアについて ..... 34  
塩田 久朗

### コラム

炭都の娘はうたごえに乗って ドンと掘れ黒ダイヤ 夕張娘 ..... 38  
山中 憲治

### もっと知りたいアイヌの心48

蛙と雷神の妻になった娘 ..... 42  
佐賀 彩美

### わが村は美しく-北海道 未来へつなぐ 第63回 -壮瞥町-

一人ひとりの手で自然の恵みを受けて有機農業を ..... 43  
合同会社自然農業社

### お知らせ

お知らせ ..... 44



# 防災・減災シンポジウム in 留萌

## 災害に強くしなやかな社会づくり

昨年は9月に道東地方で北海道初の線状降水帯が発生し、12月には青森県東方沖の地震により「北海道・三陸沖後発地震注意情報」が初めて発表されました。自然災害の激甚化が見られるなかで、地域の防災力の向上がますます重要になっています。

北海道開発局では昨年12月12日、標記シンポジウムを留萌市（留萌市文化センター、オンライン同時開催）で行い、約900名の方々にご参加いただきました。

プログラムの第1部では、「留萌地方の地域特性（気象特性と地震・津波特性）」と題して旭川地方気象台次長の野田平聡氏による情報提供と、「留萌地域の防災の取組」について留萌市総務部総務課主幹（防災担当）の吉田泰規氏、北海道開発局留萌開発建設部の旭峰雄治水課長、大井保道路防災推進官による事例紹介が行われました。第2部では、災害の危機管理対応や防災教育の専門家として地域防災の現場で数々の実績を上げてこられた東京大学大学院情報学環特任教授の片田敏孝氏の講演が行われました。本稿では、この講演を抄録でご紹介します。

### 講演：「地域で守るいのち～災害と向き合う力」

片田 敏孝 氏（東京大学大学院情報学環特任教授）

### 「北海道・三陸沖後発地震注意情報」はなぜ必要なのか

先日の青森県東方沖を震源とする地震（2025年12月8日・M（マグニチュード）7.5、最大震度6強）では、東北と北海道の太平洋側に津波警報が発表され、さらに「北海道・三陸沖後発地震注意情報」が初めて発表されました。私は内閣府の日本海溝・千島海溝沿いの



国土交通省北海道開発局事業振興部防災課

#### 片田 敏孝氏（かただ としたか）

1960年岐阜県生まれ。東京大学大学院情報学環特任教授。群馬大学名誉教授。専門は災害社会学、災害情報学。災害への危機管理対応、災害情報伝達、防災教育、避難誘導策のあり方などを研究し、全国各地で地域の防災活動を指導。国、自治体の各種審議会に携わり、防災行政の推進にあたっている。2012年には防災の功労者として2つの内閣総理大臣表彰を受賞。著書に『人に寄り添う防災』、『ハザードマップで防災まちづくり』ほか。

後発地震への注意を促す情報発信に関する検討会の座長でしたが、議論の末、過去の大規模地震に見られる連動性をもとに発生後1週間を目途に強い警戒を呼び掛けることになったのです。ただ、多くの方にはわかりづらい情報だったことでしょう。

大規模地震の連動性というのは、例えば、東日本大震災はM7.3の地震の2日後の後発地震（東北地方太平洋地震M9.0）として発生し、1963年の<sup>えとろふとう</sup>択捉島南東沖地震（M8.5）はM7.0の地震後、18時間後に起こっています。先発、後発の地震の発生間隔の時間や日数は長短さまざまですが、連動性は確かにあると言えます。

今回の北海道三陸沖の地域は、もともと今後30年間に80%の確率で大規模地震発生の可能性があるとされていました。これは1週間の確率に換算すると約0.1%です。これに対して今回のような地震発生後1週間の大規模地震の発生確率は約1%で相対的に高くなります。1%の根拠は、世界のM7以上の地震（1904～2017年）1,477事例のうち、M7.8以上の後発地震の発生は17事例で、この発生確率からきています。可能性が0.1%から1%に高まっているということで、これはやはり警戒を強めた方がいいのです。

北海道で特に警戒を要するのは千島海溝や日本海溝周辺の高溝型地震です。千島海溝周辺については津波の堆積物から約6500年間に18回の巨大地震の痕跡が認められ、約300～400年に1回の割合の発生です。直近の発生は17世紀なので発生の時期に来ていると考えるのが自然です。日本海溝の方も1611年慶長三陸地震の大地震以来、相当の年数が経っており、警戒の時期に入っていることは間違いありません。

この海溝型地震は日本海溝M9.1、千島海溝M9.3と予測され、被害想定は最大津波高約30m、最大死者数約20万人となっています。ただし、対処の仕方によって死者数を8割減らすことが可能とされています。それにはみなさんの津波に対するきちんとした避難意識と行政による津波避難ビル・津波避難タワーなどの活用・整備などのしっかりした取り組みが必要です。完

全な対策はないかもしれませんが、住民も行政も一体となって災害に向かい合える状況を精一杯努力してつくるしかないのです。

### 防災情報をどう受け止めたらいいか

北海道・三陸沖後発地震注意情報と同様に、巨大地震発生の可能性が相対的に高まったとして発表されたのが、2024年8月8日の宮崎県南部の地震（M7.1、最大震度6弱）に伴う「南海トラフ地震臨時情報」でした。

真夏のことで海水浴場の閉鎖やイベント延期が検討されましたが、高知の「よさこい祭り」は万全の避難体制を整えて開催する、と判断されました。それでよいと思います。個人ベースでも対処を考えた上で海水浴に行く、いや、自分はやめておく、といろいろな判断がありますが、それでよい。要は、自分はどう考えるかで判断するより仕方ないのです。

南海トラフ地震臨時情報の際も私は内閣府の検討会議のメンバーでしたが、こうした発表でいつも感じるのは、私たちが出すのは「状況通達型情報」で「行動指南型情報」ではない、ということです。つまり、過去の大規模地震の連動性を根拠に警戒すべき状況をお伝えするが、それをもとにどう行動したらいいかまではお伝えしていない。それは私たち専門家でもわからないのです。可能性の高まりを伝える防災情報に対して、受け手である住民は自ら判断し、行動することが求められています。

津波予報については、気象庁から発表される津波の高さで本当に津波が来た試しがないと、予報を大げさに感じる人も少なくないでしょう。なぜそうなるかと言うと、津波という現象が非常に複雑で、さまざまな見方で予測し得ることが関係しています。

現在、全国に66の津波予報区があるのですが、一つの子報区にはいくつも予測の地点があって、そのなかで予測される最大値の津波の高さに基づいて、その子報区全体の警報や注意報が決定されます。ですから、それが的中したとしても他の多くの地点では予測より

津波は小さいということになる。そうすると、確かに「なんだ、大したことがなかったじゃないか」と受け止められて警報が出て避難しなくなってしまう。しかし、そんなことを繰り返していると、最後には「しまった、逃げておけばよかった」ということになるのです。

津波警報も後発地震情報も可能性があるから出されているのです。被災しないためには、その都度逃げて、最後に「逃げていてよかった」を勝ち取ることが災害に向かい合う姿勢として必要です。

後発地震情報は1週間経つと解除されます。検討会議で議論して1週間と決めたのですが、これは決して安全宣言ではありません。過去事例における後発地震発生までの期間はさまざま、東南海地震（1944年）と南海地震（1946年）では2年という例もあります。

しかし、長期間、警戒心を保つことは現実には無理ですから、どこかの時点で解除しなければならない。そこで1週間というルールで解除したのですが、地震発生の可能性があることに変わりはない。日ごろから逃げられるように備えましょう、ということなのです。

### 複雑な津波のメカニズム

北海道近海では1990年以降、93年の釧路沖地震から2018年の北海道胆振東部地震までいくつもの大きな地震が続いてきました。近年では22年8月に宗谷地方北部で最大震度5弱の地震が発生し、その20分後に5強の地震が発生しています。

津波で多くの犠牲者を出し甚大な被害を奥尻島にもたらしたのが93年7月の北海道南西沖地震でした。このとき青苗地区では概ね5m程度の津波でしたが、少し離れた藻内地区では30mに達していました。なぜ、こんなことが起こるのでしょうか。

津波は島の周りをグルグル取り巻くようにして何度も島を襲います。北海道本島に当たって戻ってきたものを含め、偶発的にいくつもの波が重なることでピンポイントでは30mになり得るのです。また、日本海は対馬や北海道の周辺で細くすぼまっている閉鎖海域

で、このなかで津波が起こると波はあちこちにおつかってなかなか収束せず、偶発的に大津波が発生します。太平洋側に比べて日本海側は大きな津波がなくて安全だなどとは絶対に思わないでいただきたい。

今年7月30日にはカムチャツカ半島付近で地震がありました。M8.8で北海道を含む太平洋側の広い範囲に津波警報が出されましたが、日本での最大震度は2、観測した津波は岩手県久慈港の1.3mで大きな被害はありませんでした。

長い距離でやってくる「遠地津波」は海底の地形の複雑さもあり、予測は特に難しいのです。地震動は距離が離れると減衰しますが、水中でエネルギーが伝わる津波はあまり減衰しません。その典型が1960年のチリ地震津波でした。M9.5の巨大地震で岩手県沿岸などに5m超の津波が押し寄せ、北海道と東北を中心に死者行方不明者約140人という大きな被害をもたらしました。津波は発生地点から最終的に地球の裏側に集まります。チリの沖合の真裏はモンゴル周辺ですが、ハワイを通ることで日本に照準が合い、北海道、東北を襲うことになったのです。

研究者の間でも津波予測は「倍半分」と言われるように、実際の津波の高さが予測の倍になることも半分になることもある不確実なものです。しかし、可能性があるから津波警報は出されるのであって、それを踏まえて住民も行政も不測の事態に備えて最善の行動をとっていただく必要があります。

北海道のような積雪寒冷地では特に寒さ対策が重要です。厳寒期の津波被災の事例では1952年の十勝沖地震（M8.2、最大震度6）があります。浜中町霧多布地区では流水の断片が市街地を襲い、高台への避難も積雪で阻まれる悲惨な状況でした。

しかし、流水接岸時と津波が重なる可能性はどれぐらいあるのでしょうか。流水ありきで備えようというのは無理があり、悲観的な状況ばかり考えていたら対策は進みません。今できることを精一杯やるという姿勢を持つことが防災だと考えていただきたいのです。

### 線状降水帯発生で急がれる大雨対策の強化

北海道は自然の恵みが豊かであると同時に、時に自然の荒ぶる状況にも付き合わなくてはならず、災いも豊かです。さまざまな自然災害に備えなければなりません、そのなかで近年目立っているのが大雨災害です。今年8月に豊富町や釧路市で、10月には苫小牧市、と水害が相次ぎ、注目すべきは9月に釧路地方、十勝地方で北海道では初めての線状降水帯が発生したことです。緯度の高い地域の雨の降り方は優しい、と言われてきましたが、北海道でも南方のような激しい降り方が見られるようになりました。北海道の雨対策のレベルを上げていく必要があります。

日本全体に夏の平均気温の上昇傾向は著しいですが、地域別の夏の平均気温年差では北日本が格段に高い。このため空気中に含まれる水蒸気量は多くなり、降水量も多くなります。地球温暖化が進むなかで今後どうなっていくのか。100年後の年最大降水量の変化率を算出したデータによると北海道1.24倍、東北1.22倍と北日本が特に高いのです。

このような傾向から、北海道では過去の気象データをもとに整備されてきた河川堤防では対処し切れない事象が発生する可能性があります。北海道は日本全体にとっての食料供給地であり、河川堤防強化など大雨災害への対策を一層、強化していただきたいのです。

近年各地で豪雨災害が多発しているのは日本近海の高い海水温が影響しています。海水温が高いと空気のなかに抱え込む水蒸気量、つまり飽和水蒸気量が多くなり、一度に降る降水量が増加します。また、台風は高い緯度で発生して勢力を維持したまま北海道にも来てしまう。2016年8月には北海道に1週間に3つの台風が上陸するというかつてないことが起こりました。また、2020年7月の熊本豪雨では、水蒸気を水に換算した推定流量で信濃川の約800倍、アマゾン川の約2倍の流量が「大気の川」となり、複数の線状降水帯を生んで豪雨災害を引き起こしたのです。

### 防災の実効性の鍵とは何か

2024年1月1日、能登半島地震が起きました。近年、この付近で変な地震があるので気を付けなければと話していたのですが、最大震度7の激震に見舞われるとは思っても寄っていませんでした。

現場とやりとりしながら切迫した状況を見守っていたのですが、輪島の朝市では家屋倒壊で火災が発生するなか、地盤隆起で川底が上がり消火活動ができない。助けを呼ぶ声が聞こえても、津波警報が出ているので消防団員は現場を離れなくてはならない。そのようなとてつもない惨状が起っていました。また、山の方には高齢者たちが住む小さな集落があり、地域防災計画では周辺から支援が入るはずが、土砂崩れの道路閉塞で助けに行けないということもありました。全く聞くに耐えないような厳しく辛い状況でした。

さらに同年9月に被災地を襲ったのが大雨による水害でした。神も仏もあつたものではない、と言いたくなる容赦ない事態でしたが、それこそが「災害の本質」なのです。

では、このような厳しい災害に向き合うための防災の実効性となる鍵とは何でしょうか。防災に関する豊富な知識、充実した情報、避難路や避難所など行政の努力が必要ですが、決め手になるのは結局、住民一人ひとりがきちんと行動することです。なかでも私が痛感するのは「家族や地域における命のつながりや思い合う心」の大切さです。

私は東日本大震災の8年前から岩手県釜石市に子どもたちの防災教育で通っていましたが、震災後、辛い作業ですが、被災地で犠牲者がどのように亡くなったかの調査を行いました。そのなかで特に印象に残るのは、地域で気遣ってきた高齢者を必死に探し回った消防団の若者の事例、そして、そばにいたはずの小さな子どもを血眼で探した若いお母さんの事例です。いずれも逃げ遅れて津波に飲まれていったのですが、消防団の若者も若い母親も防災意識が低かったわけでも情報がなかったわけでも、避難路がなかったわけでもあ

りません。人間として逃げられなかったのです。

人は我が身の危険を感じる事態に接したときに真っ先に何を思うのか。それは大事な人のことであり、それは人間として当たり前のことです。そうしたことを含んで対応できる状況をつくるのが防災における実効性の鍵となります。

### 東日本大震災で釜石の子どもたちが守り抜いたこと

2011年3月11日午後2時46分、校庭でサッカーをしていた釜石東中学校の生徒たちを激しい揺れが襲いました。中学生たちは校舎に向かって「津波が来るぞ、降りてこい」と呼びかけ、隣の鵜住居小学校からも子どもたちを呼び出して高台に向かって走りました。途中、鵜住居保育園から保育士さんが乳幼児を連れて出てきたのを手伝い、高齢者にも肩を貸すなどして、結局、子どもたちの一団は約1.7キロを逃げ切りました。

当時のハザードマップを見ると、釜石に壊滅的な被害をもたらした明治三陸津波（1896年）など過去の津波をもとに想定された津波浸水区域に、釜石東中学校も鵜住居小学校も入っていません。普通ならば避難所になるようなところですが。だから中学の先生は生徒たちに「校舎の3階に避難しなさい」と促したのですが、生徒たちは「それ以上の津波が来たら、逃げる場所がないよ」と応じなかった。もし校舎の3階に残っていたら間違いなく約600人の子どもたちの命はなかったでしょう。

この中学生たちが小学生だった時に私は防災教育のモデル授業で1年間、彼らを指導しました。そのなかで大きな地震が長く続くときは、その後に巨大津波が来る可能性があるとして海外の津波被害の写真を見せるなどして教えていたのです。

子どもたちはそれを覚えていて、可能な限り高台に逃げることを実践してくれました。最初の避難場所として目指したグループホームに着いてからも安心せず、さらに高台の高齢者施設まで走りましたが、それでも列の最後の子は津波に足を洗われており、本当にギリギリで助かったのです。

可能な限り精一杯、逃げるという姿勢を貫き、多くの命を守り抜いてくれたこの子どもたちのことは、その後、マスコミなどで「釜石の奇跡」と呼ばれましたが、私はどんな言葉を使ってでもこの子どもたちをほめてやりたいと思っています。

### 防災教育とは「命の教育」

明治三陸津波以来、何度も大津波に襲われている釜石には、この鉄の町を守ろうと国が威信をかけて釜石湾に建設した湾口防波堤（1978年着工・2009年完成）があります。世界最深と言われる水深63mから立ち上げた巨大なもので、これが完成したところから釜石の人たちは安心し切って津波情報が出て逃げ渋るようになりました。このような「堤防依存」を懸念し、私は釜石市に通うようになったのです。

防災教育を手掛けようと小学校にも出かけるようになったのですが、子どもたちは津波警報が出て「立派な堤防ができたから、逃げない」、「じいちゃんも逃げないと言っている」と言います。しかし、「避難しない」環境で生まれている子どもたちの命は、子どもたちが生きている間には来るだろう大津波で奪われることになります。

そこで高齢者大学の防災講演会で、私は非常に厳しいことを言いました。「じいちゃんが逃げないので、孫たちは逃げないと言っている。じいちゃんはその背中で孫の命を奪うのだ」と。人間は「正常性バイアス」と言って、自分が事故や災害に遭って死ぬなどとはなかなか頭に浮かばないものですが、孫の命を考えた途端、高齢者たちの思いや態度は豹変（ひょうへん）します。防災意識の実効性の鍵はここにあるのです。

私が釜石で防災教育を行った学校の一つに釜石小学校があります。児童数186人の学校でしたが、震災時は全員逃げおおせて命を失った子はいませんでした。震災前の防災教育の授業では、高いところに1秒でも早く逃げることなど基本的なことを伝えた後で、子どもたちに「みんなが逃げた後で、みんなのお母さんは

どうするだろうか」と問いかけました。そうすると子どもたちは一斉に顔を曇らせて「迎えに来てしまう」と言います。お母さんにも早く逃げてほしいのに、迎えに来たら逃げ遅れる、どうしようと。

私は「君のことを一人できちんと逃げられる子だと思ったら、お父さんやお母さんは迎えに来ない」と言ってやります。自分の命を守ることが親の命を守ることだと理解した子どもたちは「絶対に逃げる」と心に誓うのであり、内発的な避難意識が醸成されるのです。このような学びがあって、子どもたちはあの日、懸命に逃げてくれたのだと思います。防災の実効性の鍵は命への思いやりであり、そういう意味で防災教育は「命の教育」です。

### 大切な防災のコミュニケーション・デザイン

これまでお話してきたことからおわかりのように、地震や津波に対する備えで鍵となるのは結局、自分の心の問題であり、大事な人を一緒にみんなで守る、という家族の防災、地域の防災の考え方です。

防災の行動変容のために、とかく行われがちなのはデータや事実を提示して理路整然と説得することですが、本人の納得感がなければ意味はありません。本人と価値観を共有し共感しながら「なるほど」と納得を導き出すことが効果的な防災のコミュニケーションなのです。

フランスの哲学者ジャンケレヴィッチは、人の死には「一人称（自分）」、「二人称（家族）」、「三人称（他人）」があると言いました。防災コミュニケーションに当てはめると、一人称は「地震のときはこうしましょう」と指差的に教えこむことで、正常性バイアスにより有効には働きません。また、三人称は客観的な事例を持ち出して知識で説得する方法ですが、これも当事者感が生じにくい。

いかに防災を自分事化させるかは二人称です。大事な人を思い浮かべ、心配になることで姿勢が変わる。「地震でお母さんが家具の下敷きになって津波から逃げられなくなったら、君はどうする?」。小学校の防

災教育で、私はこんな問いで子どもたちを悩ませるのですが、「家具の固定さえしていれば、こんな嫌なことを考えなくて済む」と伝えることで、子どもたちは自分事として対策の重要性を理解します。

このようにコミュニケーションをどう設計するか、というコミュニケーション・デザインが防災には大切なのです。

### 世代、時代を超えて伝えていく地域防災

大事な人の命を守り、地域から犠牲者を出さないように、みんなで考え、助け合うことが防災であり、それは地域に住まうお作法です。そして、そうした環境のなかで子どもを育むことで防災は次の世代に受け継がれ、やがて文化の礎ができます。

東北太平洋沿岸は古くから津波常襲地域で、過去の津波被災者たちが後世のために残してくれた石碑がたくさんあります。その一つ、明治三陸津波後に建てられた宮古市姉崎の津波記念碑には「高き住居は児孫の和楽 想へ惨禍の大津波 此処より下に家を建てるな」と刻まれている。釜石の防災教育で中学生たちをこのような碑を見せに連れていったものですが、先人たちの思いを受け止めた子どもたちは、地域の一員として防災活動に率先して取り組んでくれるようになりました。

東日本大震災で亡くなった方の年齢構成について岩手、宮城、福島で比較しますと、全体に高齢者の犠牲者率が高いのですが、岩手県は学齢期の子どもと後期高齢者の犠牲者率が他県より低いという結果が出ています。この結果を見たとき、釜石で携わった津波防災教育の広まりが効果を生んだのではないかと思います。

避難訓練のなかでも子どもたちが高齢者を思い、高齢者が子どもたちを思いながら声を掛け合う場面をよく目にしましたが、震災のあの日も子どもたちは高齢者を助けながら懸命に避難して命を守ってくれたのです。地域、家庭で互いに思い合うことによってこそ、防災に実効性が生まれると考えます。



# データの活用と情報共有に向けて ―第6回北海道ドライブ観光促進プラットフォーム会合―

国土交通省北海道開発局開発監理部開発連携推進課

## はじめに

国土交通省北海道開発局は、北海道のインバウンド観光の課題である地域間・季節間の旅行需要の偏在緩和のため、平成29年度にスマートフォンアプリを活用した、外国人ドライブ観光客を地方部へ誘導する社会実験を実施しました。平成30年度に北海道ドライブ観光促進プラットフォームを設置し、外国人ドライブ観光促進のため、アプリ測位データの分析結果を会員に共有してきました。

11機関で始まったプラットフォームは、令和8年2月末時点で109機関により構成されています。令和7年も11月26日に「北海道ドライブ観光促進プラットフォーム会合」を開催しました。

## 会合開催挨拶（要旨）

宮藤 秀之 氏（国土交通省 北海道開発局 開発監理部次長）



北海道開発局のドライブ観光の取組は、平成20年度に実施した「北海道における外国人ドライブ観光の推進方策検討調査」に遡ります。その後、社会実験を行い、地方誘客に向けた外国人ドライブ観光の

有効性が示唆され、本プラットフォームの立ち上げに繋がっております。

今年度から、外国人ドライブ観光客の移動データを直接ダウンロードいただけるような取組を始めました。一方、データ活用の意向はあるものの、効果的な活用方法がわからないといったお声もございましたので、今年度の会合では、データのさらなる活用を目指したプログラムを組み込んでおります。

本日の会合が、参加の皆様にとりまして、外国人ドライブ観光の促進をより充実させる機会となることを祈念いたしまして、開会の挨拶とさせていただきます。

## 基調講演「インバウンドの潮流と北海道ドライブ観光の方向性」

亀山 秀一 氏 ((株) JTB総合研究所 主席研究員)

訪日インバウンドについては、全体的に満遍なく増えています。割合的に欧米豪の伸びが顕著です。宿泊数含め、まだまだ三大都市圏のシェアが高いですが、欧米市場の中には、地方部の延べ宿泊数の伸びが高いという市場もあります。



旅行消費に関しては、観光立国推進基本計画の目標は達成しています。その中でも、「娯楽等サービス

費」は比率・消費額とも拡大していますが、地域にお金を落としていただくためには、ここをさらに伸ばしていく必要があります。

ニーズが多様化してきているので、テーマ性のあるツアーやアクティビティの需要が高まっています。ニッチな観光というのも成立しうる状況になってきています。

ドライブ観光を考えるにあたって、二次交通が不便だからとか、地域分散のためなど、受入側の理由ではなく、ドライブ旅行自体の魅力を発信するという発想を持ってPRするのも一つのやり方だと思います。なおかつ、経済効果をルート上で持たせようということを考えると、単にドライブが楽しいということだけではなく、プラスアルファの要素が必要です。ルートをつなぐ際、旭川、富良野と札幌をつなぎます、ということではなく、旭川でこういうことができるとか、富良野でこういうことができるとか、お金の落ちるアクティビティをつなぐ、という意識でドライブをPRしていく必要があると思います。



「北海道といえばドライブ」というブランディング、ルート設定やネーミングも大切です。北米では「カスケードループ」のように、ルートとしてネーミングされていて、ルートとしてプロモーションされているところがあります。ルートにされていると、そこを辿ってみたいくなる習性を、日本人以外も持っていると思います。まだまだ北海道のドライブ旅行は伸びていくと思います。

## 専門講演1「移動データから読み解く外国人ドライブ観光客の動向と比較」

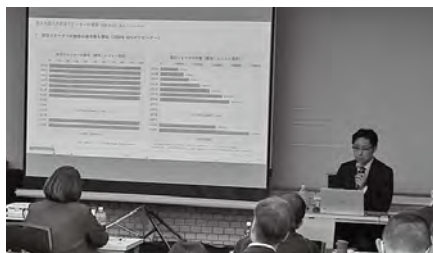
藤澤 政志 氏 ((株) ナビタイムジャパン トラベル事業地域連携シニアディレクター)

当社データでは、初めて日本に来た方はゴールデンルート、北海道は相対的に訪日リピーターが多いと出ています。また、全国的には、訪日回数が増えると地方訪問が増えますが、北海道は何度来ても王道観光地に行く割合が多い傾向が読み取れます。アジアが多いということもありますが、感覚的には日本人と同じ楽しみ方、日本人と同じ観光スタイルに見えてきます。何度も北海道に来てますよ、という日本人は多いんですけど、地域に分散してるかというところでもなく、同じ場所、富良野に何回も来ましたとか、旭川に何回も来ましたとか、函館に何回も来ました、と日本人でも多いんですけど、外国人もそういう観光スタイルなんじゃないかなっていうふうに思っています。



道央から外れた時の楽しみ方として、地域の文化や資源を学べるスポットへの訪問も増えているような様子が伺えました。例えば、ビートの資料館とか、国際ツルセンター、帯広百年記念館に行ってみる。こういったその地域の文化を知るといような、多分、公共交通でなかなか行きにくいところも、ドライブの観光だと選ばれやすいんじゃないかなっていうふうには見

ています。こういったプロモーションは、今まであまりやってきていないはずなので、地域の文化資源に合わせて、それが学べる場所もセットでプロモーションしていくということは、私はすごい大事なんじゃないかなって思うふうになっています。



豪州もドライブ観光が盛んです。豪州のドライブルートは海岸線中心ですが、北海道は美しい海岸線と山間部で二度美味しい。来道経験者が増えてきている中、そのようなドライブコースそのものを全面に出したブランディングの可能性を非常に感じています。海外はモニュメントで地図を作るのがうまい。ドライブルート上に何があるのか、認知度向上や資源の見せ方も大事だと思います。

## 専門講演2「北海道の魅力と来道外国人観光客の実態と北海道ドライブ観光」

菊地 敏孝 氏((株)北海道宝島旅行社 執行役員 旅行営業部)

アドベンチャートラベル・ワールドサミットに参加した約800人の旅行会社、メディアなどから、北海道はとても良い評価を得ました。その中でも一番言われたのはカルチャーで、ネイチャーに付随しているカルチャーが非常に面白いんだと。さらにそのネイチャーとは、北海道は千島列島火山帯にある火山の島だということ。ドライブしていても、ちょっとしたところに噴気孔があり、モクモクしている硫黄山が近づいてきたらワクワクするし、永久凍土の丘を越えて広がる海景色はすごく綺麗だし、北海道は世界的にまれに見るような特別な自然環境をもっている場所と認識されています。



豪州もドライブ観光が盛んです。豪州のドライブルートは海岸線中心ですが、北海道は美しい海岸線と山間部で二度美味しい。来道経験者が増えてきている中、そのようなドライブコースそのものを全面に出したブランディングの可能性を非常に感じています。海外はモニュメントで地図を作るのがうまい。ドライブルート上に何があるのか、認知度向上や資源の見せ方も大事だと思います。

当社では2018年の時より高単価のお客が増えていきます。当時、単価として非常に良い層だったお客様が、2024年には8割を占めるくらいになってきました。文化、自然、アクティビティを7~10日間、ドライブで楽しみたいというお客様です。アメリカやハワイのお客様が多いのですが、交流を非常に求める傾向にあり、地方によく行かれますので、オーバーツーリズム回避にも繋がっていくのではないかと思います。

ドライブ観光は道路を使った観光ですので、観光要素の前に、まずは北海道らしい自然景観、農村景観や酪農景観。その景観を探っていくのに、自転車で走るのは大変なので、自動車で巡るのが、その地域の魅力を一番感じやすいと思います。

あと、日本、47都道府県の中で、北海道の差別化をしっかりとしていかないと、せっかく世界の商談会に出ても、きちんとPRしていけない、目的地にはならないんじゃないかなって思うふうになります。



### おわりに

この後、会場ではQGISを操作して移動データの活用方法を実演したり、講師陣によるトークセッションを通して、さらなるデータ活用や、北海道の外国人ドライブ観光をさらに深掘りしました。また、参加者との意見交換を通して構成機関の交流を深めました。

引き続き、外国人観光客を地方部へ誘客し、季節偏在などの課題を解決できるよう、オール北海道でドライブ観光を促進してまいります。

会合の概要を北海道開発局HP内に掲載しています！



# 令和8年度の開発調査総合研究所の活動について

(一財) 北海道開発協会 開発調査総合研究所

北海道開発協会内に設置された開発調査総合研究所は、これまで、北海道開発を進めていく上での様々な課題を解決するため、北海道開発政策や社会基盤のあり方、地域振興に関わる実践的なテーマについて、独自に調査研究をし、また大学研究者などと共同研究を進めるなどしてきました。本稿では、当研究所が今年度に進めていくことにしている各般の取り組みの概要を説明します。

その前に、現在の北海道の状況を考えてみましょう。

昨今、私たちの周りでは、観光客数の増加や、ラピダスや宇宙産業のような新しい産業成長の期待の高まりといった明るい話題をよく聞くようになりました。とはいえ、観光にしても新しい産業にしても、それは広い北海道の中では主に特定の地域の中でだけの動きと言わざるを得ず、そこからは遠く離れたその他の多くの地域（農村地帯と言った方がわかりやすいかもしれません）にとっては、自分たちとは全く関係のない話となってしまいます。

一方で、そうした地域には、現行の北海道総合開発計画が呼ぶところのいわゆる生産空間が広がっています。そこで獲れたたくさんの大地の恵みや海の恵みは日本全国に届けられ、多くの人々に喜びや幸せをもたらしています。本州でも、四国でも、九州でも、デパートや大型ショッピングモールでは北海道物産展が開催されて、どの会場にも本当にたくさんの人たちが集まっていますし、地方都市の食品スーパーにおいてさえ、店頭の一部で「北海道フェア」コーナーが特設されているのを見ることがあります。開催の頻度は、明らかに、他の地域の名前を冠したフェアに比べて圧倒的に多いように感じられます。また、全国のあちこちの県で、地元の会社が地元で販売する菓子に「北海道産の原料を使用！」の文字が大きく印刷されていることもあります。こんな状況を見ると、将来にわたって、北海道の各地域が日本に必要な状況は変わってはいけなし、また、変わることもないだろうと思います。

問題は、人口減少や過疎化などによって（生産機能以外の）地域社会の機能が低下していることです。農漁業に携わる人たちにしてもそれぞれ私生活があり、生活の上ではいろいろな必要があるはずですが、そうしたものを満たす機能が少しずつ失われつつあるということです。公共サービスが縮減したり、買物が不便になったりしているのです。

こうした状況を踏まえて、当研究所では、北海道に明るい未来をもたらすような諸々の動きにも目を配りつつ、全体としては、様々な課題に直面する地域の不安定要素の解消に向けた提言を行うための調査研究に比重を置きながら、日々の業務を進めています。

令和8年度に取り組むことにしている調査研究の概要は、以下のとおりです。

## (1) 北海道の地域おこしに関する調査研究

### ① 北海道の持続可能な自治体展開に関する調査研究（継続調査の2年目）

少子高齢化の影響などにより、自治体では新卒採用だけでなく社会人枠での採用も減少しています。このため、特に技術職では定年後の職員に、会計年度任用職員として引き続き仕事をしてもらって凌いでいるなどの実態があります。今後、更に進む地域での人口減少の中、自治体では持続的な地域運営をしていくために、これまでの事務仕事の見直し、効率的な作業を行うためのデジタルの導入による業務の改善、自治体同士の横連携の他、北海道との垂直連携も視野に入れて対応する必要もあると考えられます。

このようなことから、自治体のDX対応を中心に、地域活性化起業人などの各種制度を活用している取り組みの内容や、自治体間の連携などの課題と方策を調査します。

### ② 北海道における地方集落の将来像に関する調査研究（新規調査）

北海道の多くの市町村で人口減少が進んでいますが、同一の町の中にあっても、第二、第三以下の集落は、いわゆる本町地区に比べて、一般に人口が少なく、また、相対的に役場との繋がりが希薄です。

本調査研究は、このような本町以外の集落について、当研究所が令和7年度までに実施した地域コミュニティに関する研究での議論も踏まえながら、集落のあり方や施設などの物理的態様についての将来的な姿を考えていくこととします。特に、住民が安心して暮らしていくためには、生活サービス機能などを集約した地域生活を支える拠点があって、そこが、住民同士の交流の場としても機能することが望ましいとの視点から、そうした実例の現地調査などを行い、課題の検討を行うことなどを進めていきたいと考えています。

### ③ 北海道の博物館・郷土資料館に関する調査研究（新規調査）

北海道は北前船の交易を始めとして、各地から得られる農産物・水産物や燃料、材を活用するため、開墾や輸送施設、農地改良などの基盤開発をしながら発展してきました。しかし、それらを担ってきた多くの地域は、現在、政策転換や資源の枯渇などの影響を受けて、人口減少や過疎の問題に見舞われています。

そこで、それらの特色ある地域の歴史を伝える地域の博物館・郷土資料館を応援することで、施設の維持や郷土研究の促進のみならず、当該施設を利用した活動を通じて地域の活性化を図ることや、観光資源としての活用を考えていくことを意図して、調査研究を進めます。

なお、本誌で連載中の「北海道の博物館・郷土資料館」紹介シリーズは、本調査研究の一環です。

#### ④ 地域の交通と観光に関する調査研究（新規調査）

北海道では人口減少と各地の過疎化が進み、生活に欠かせない路線バスなどの公共交通は利用者の減少や運転手不足により運行縮小が進んでいます。このため、自治体ではコミュニティバスの運行などで対応していますが、今後持続可能なものにしていくためには課題も抱えます。こうした中、個人旅行の増加や観光目的の多様化により地域交通資源の新たな可能性が広がっています。

本研究では、これからの時代の観光が地域交通課題の解決にどのように貢献できるかについて考えることとし、「ライドシェア活用」などによる課題解決の可能性について調査していきます。

#### ⑤ 北海道における新しいインバウンド観光のあり方に関する調査研究（継続・最終3年目）

地方創生の切り札として位置づけられる観光は、北海道において地域の重要な産業となってきました。コロナ禍で激減した海外からの観光客も復活し、今後の期待感も膨らんでいます。しかし、特定の観光地では、観光客の増加が、地域住民の生活や自然環境、景観などに対して負の影響をもたらし観光客の満足度を低下させるだけでなく、地域住民の感情を害するオーバーツーリズムが報告されています。

本研究では、北海道のインバウンド観光を持続可能にするために重要な課題となっているオーバーツーリズムについて、「①マナー違反」「②許容量超過」「③需給バランスの崩れ」の視点から課題を抽出し、これからの北海道に必要な「数を追い求める観光から質を重視した観光」への転換による地域活性化の可能性について検討します。

#### ⑥ 地域の社会・経済データベースの構築に向けた調査研究（継続調査）

地域政策の策定及び検討に不可欠な、北海道の経済・社会指標などに関するデータは、所管するそれぞれの機関において電子化されていますが、当研究所では、利用頻度の高いデータについて、令和元年度から毎年、簡易に利用できるデータ集（紙媒体と電子媒体）として取りまとめているところです。

本年度も、「北海道インバウンドインフォ」(<https://inbound-jp.info/>)に、「社会経済データベース」、「インバウンドデータベース」のデータを掲載するとともに、北海道市町村別データのハンドブック2026年度版及び地域づくりの動向2026年度版を作成することとしています。

### (2) 北海道開発に関する研究助成

北海道の地域が直面する課題の解決に向けた社会科学的分野の研究で、今後の北海道開発の推進に寄与するものに助成を行っています。令和8年度の助成テーマは、『デジタル時代における地域通貨』となっており、道内各大学の研究者の方々からの申請を受け付け、委嘱した研究助成選考委員会委員による検討を経て、助成対象を決定しました。

また、当該年度のテーマに係るシンポジウムを開催する予定です。

### (3) 開発ライブラリーの運営

北海道開発に関する収集図書・資料や、当協会がこれまで発行した調査研究報告書、広報誌及び執務上収集した図書・資料などは、「開発ライブラリー」として広く一般に情報公開しております。その主なものは、当協会ビルの玄関ホールの中棚にてご覧いただけます。他の書籍や資料などは、情報検索のサポートをしています。当協会ホームページにある「開発ライブラリー」の項目もご覧ください。

### (4) 地域活性化活動への助成

北海道開発の推進に寄与する地域活性化活動に対し助成を行っています。

また、当研究所からこの助成への申請があった団体への働き掛けなどを通じて、活動団体間の交流・連携を図っています。昨年度からは、新たに、地域活動ネットワークの構築に向けた取り組みも行っており、令和8年度も引き続き取り組んでいくことにしています。

このほか、北海道開発協会が、昨年、旭川市立大学及び同大学短期大学部と包括連携協定を結んだことから、今年度、当研究所では、地域連携研究センターを中心とした同大学の研究者の皆様の協力を得た取り組みを進めていくことにしています。その成果は、今後、本誌上でも紹介する予定です。

以上でご紹介した当研究所の研究成果などについては、調査期間の最終年度などに報告書として取りまとめています。過去の報告書については、北海道開発協会のホームページの当研究所のページにも掲載されています（「開発調査総合研究所」で検索ください）。探したい報告書を見つけやすいように、検索性Excelデータなども収録しています。

また、主な調査研究などにおいて、随時、その成果を共有するためのシンポジウムを開催しています。開催の都度にお知らせして、多くの皆様に傍聴いただいておりますが、その機会を逃してしまった場合でも、議論の概要を、本誌においてもお伝えしてまいりますので、ご覧いただけたら幸いです。

今後とも、開発調査総合研究所の調査研究に注目して下さるようお願いいたします。



当研究所が開催したシンポジウム



当研究所の調査研究などの成果をまとめた報告書



地域活性化活動団体の活動報告会

(写真は、昨年度の実績から)

# 団体移住により拓かれた由緒あるまちの歴史を学ぶ 新十津川町開拓記念館

新十津川町 教育委員会事務局 社会教育グループ 加藤 和仁



HPはこちら



## 新十津川町の概要

新十津川町は、札幌市から国道275号を北上し、車で約1時間45分、道央空知のほぼ中央部、樺戸郡の北端、石狩川の右岸に位置し、東西約35km、南北約30km、面積は495.62km<sup>2</sup>です。



東西に横切る石狩川の右岸、中央を流れるのは徳富川

東は石狩川を隔てて滝川市、砂川市及び奈井江町と相対し、西はピンネシリと暑寒別岳を有する樺戸（増毛）山地の稜線で当別町と石狩市に接し、北は尾白利加川を境に雨竜町と南は樺戸境川を境界に浦臼町と接しています。

1889（明治22）年の奈良県十津川郷で起きた未曾有の大水害という悲劇を契機として、600戸、2,489人の大集団移住によって開村、奈良県十津川村にちなみ、ここに新しい十津川をつくるとの思いを込めて「新十津川」と命名し、奈良県十津川村を「母村」と呼びました。その後、北陸、東北地方からも移住があり、開墾が更に進みました。以来、石狩川及び徳富川流域の肥沃な平野部や丘陵地など、恵まれた土地資源を活かした農業を基幹産業として発展しています。

## ようこそ新十津川町開拓記念館へ

新十津川町開拓記念館（以下「記念館」）は、新十津川町開基77周年事業として1966（昭和41）年に新十津川信用売買組合の建物を改造して設置（現新十津川町農業記念館）したのち、より充実した記念館とするため、開基90周年事業として1980（昭和55）年に現在の記念館を設置しました。

団体移住によって拓かれた不屈の精神と新天地にかける大きな夢でつづられた貴重な文化遺産をご覧ください。

住所	樺戸郡新十津川町字中央1番地1	
電話	0125-76-2622	
開館期間	5月1日から10月30日まで 月曜日閉館（祝日の場合は翌日）	
開館時間	午前10時から午後4時まで ※金曜日は午後1時まで	
年間来客者数	1,052人（令和7年度）	

入場料区分	個人	10人以上の団体
小・中学生	100円	1人につき50円
高校生以上	200円	1人につき100円

### 新十津川の自然と歴史

記念館の展示は、十津川移民の開拓以前に遠くさかのぼるところから始まります。一面の原始林に野生動物が住みつき、近世から近代初頭にかけては、アイヌ民族が先住者として生活していました。

また、それよりもっと古い縄文時代には、「縄文文化人」「続縄文文化人」と呼ばれる人々が残した遺物も展示しています。



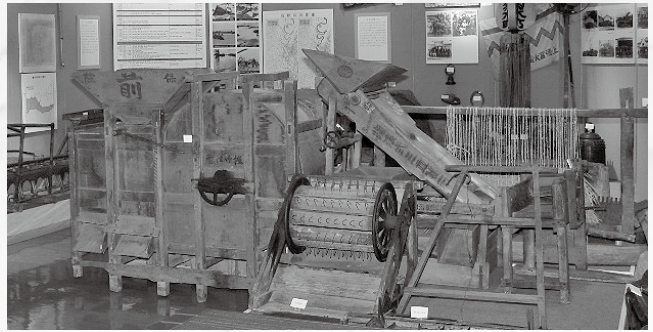
来館者を野生動物のはく製が迎える

### 団体移住と開拓の歴史

母村、奈良県十津川村での災害を受けた人々は、当時開拓地として注目を浴びていた北海道への団体移住を決め、入植した年は、そば、大根程度の作付けでしたが、翌年からは麦、とうもろこし、アワ、大豆などの自家食用作物を栽培、入植から3年後には、大型の農機具も取得し、小豆、小麦、亜麻などの販売作物の栽培も開始しましたが、1897（明治30）年、夜盗虫（ヨトウムシ）の大発生による畑作被害を契機に栽培作物は稲作へと変わっていきます。

記念館では、畑作から害虫被害の少ない稲作へと変遷していく過程の貴重な農機具などを展示しています。

また、1890（明治23）年に入植した移住者は開拓と同時に学校の建設にも取りかかり、翌年3月に2校の簡易小学校を開校するなど、子どもたちの教育にも大きな努力が払われました。当時の様子を再現した教室や教科書なども展示しています。



入植時から使用されていた貴重な農機具を多数展示

### 村から町へ～新十津川の発展～

大正期に入ると人口も15,000人を超え、昭和期に入ってから、冷害と凶作、戦争という厳しい時代を乗り越えてきました。そして、1957（昭和32）年には、待望の町制が施行され、生活環境の向上が図られるようになりました。

### 明日の新十津川町

記念館では、これまでの新十津川町の歩みを振り返り、「母村」十津川村の風習、伝統、文化、そして歴史の源を同じくする人々の気概が、新十津川町に根付いていることを、今に伝えてくれています。

ご一読いただいた機会に、ぜひご来館ください。



新十津川町無形民俗文化財である「獅子神楽」も展示

## 第3期新ひだか町創生総合戦略

#### はじめに

新ひだか町は、2006（平成18）年に旧静内町と旧三石町が合併して誕生した町で、日高振興局管内の中央部に位置しています。北には2024（令和6）年に全国35番目の国立公園に指定された日高山脈襟裳十勝国立公園の峰々が連なり、南には雄大で豊かな漁場を有する太平洋を望む、自然環境に恵まれた町です。

気候は海洋性気候に属し、近年、記録的な猛暑が続く中であっても真夏日となる日は数日程度にとどまり、冬季も積雪が比較的少なく、北海道にありながらひと冬の除雪が数回程度で済むという「涼夏少雪」の過ごしやすい環境が特徴です。

人口は河川流域や太平洋沿岸部に集中し、市街地には商業施設、医療機関、教育機関、公共施設が集積するなど、生活利便性の高いコンパクトな都市機能を備えています。

産業面では軽種馬産業が基幹産業となっており、サラブレッドの生産頭数は日本一を誇ります。「馬のまち」として全国に知られ、テレビドラマ「ザ・ロイヤルファミリー」のロケ地となったことも話題となりました。

観光面では、日本有数の桜の名所である「二十間道路桜並木」が広く知られ、春には道内外から多くの来訪者を迎えています。



二十間道路の桜並木

#### 新ひだか町の人口の推移と将来推計及び展望

本町の人口は、高度経済成長期の1965（昭和40）年の35,754人をピークに減少が続き、1980年代後半から1990年代前半までのいわゆるバブル経済期では、都市部への人口流出が進みました。1995（平成7）年には3万人を割る29,225人となり、その後も人口減少が進行しています。

国立社会保障・人口問題研究所（社人研）の推計によれば、今後も人口は減少し、2040（令和22）年には、14,866人になるものと推計されています。

本町における将来人口の展望は、人口減少が今後も進行することを前提としつつ、その減少速度をいかに緩やかにしていくかという視点に立ち、「第3期新ひだか町創生総合戦略」を策定しました。本戦略では、地方創生施策を推進する上での基本目標や目指す方向性、具体的な施策を定め、2040（令和22）年に人口15,000人を確保することを目指しています。



日高山脈とサラブレッド

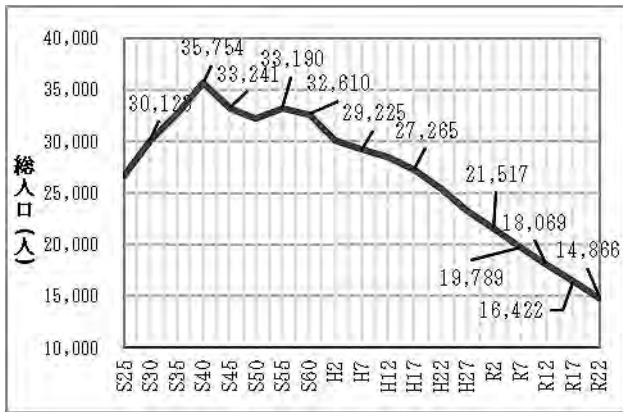


表 総人口の推移

※2020年までの総人口は国勢調査、2025年以降は社人研推計値より作成

### 第3期新ひだか町創生総合戦略の位置付け

第3期新ひだか町創生総合戦略は、第2次新ひだか町総合計画に基づく施策のうち、人口減少対策や地域活力の向上に向けた取組を重点的に推進するための戦略として位置付けています。

この戦略のもと、人口減少対策や地域の活力向上に向けた様々な施策に取り組んでいます。

### 基本目標と具体的な施策

#### 【基本目標1】新ひだか町の未来をけん引する人づくり

生産年齢人口の確保に向け、雇用の創出を支援するとともに、各産業の担い手の育成や、後継者の確保に取り組む、新ひだか町で働きたいと思える環境づくりを進めています。

また、本町では人口減少の大きな要因の一つとして、若年層の流出があり、このまま推移すれば、今後も相当数の若者が都市部へ流出することが見込まれます。

このため、小中高校における地域学習などを通じて本町への愛着を育み、将来の担い手となる人材の育成に取り組んでいます。

<目標達成に向けた主な施策>

- (1) 特産品開発等の促進
- (2) 馬を通じた人材の育成
- (3) ふるさと教育の推進 など

<施策事例>

○特産品開発等の促進－静農ブランド開発促進プロジェクト

静農ブランド開発促進プロジェクトは、2022（令和4）年度から静内農業高校、町内事業者、各産業団体等と連携し、地域資源を活用した特産品開発に取り組んでいる事業です。これまで、プロジェクト会議（年数回）の開催や外部専門家を招いた特別授業の実施、開発商品の商談会などへの出展を行ってきました。これらの取組により、2024（令和6）年度までに15品の新規商品を開発しています。

また、本事業を通じて、高校生が事業者と連携した商品開発や商談会などを経験することで知見が広がり、地域産業を担う人材育成にもつながる取組となっています。



静農ブランドで開発した商品（一部）

#### 【基本目標2】新ひだか町の魅力発信と町に関わる人づくり

本町に魅力を感じ、本町で暮らすことを選択する人を増やすため、道内外への情報発信や長期滞在型などの商品開発、イベントなどの実施により交流人口や関係人口の拡大を図り、移住・定住につながる取組を進めています。

<目標達成に向けた主な施策>

- (1) 観光資源の維持・継承
- (2) スポーツ大会・合宿等の誘致

### (3) 移住・定住の推進 など

#### <施策事例>

#### ○移住・定住の推進－滞在・移住促進事業

本町では、移住・定住を促進するため、実際に暮らしてみしてから移住を決断できるよう、最長1年間滞在可能な「ちょっと暮らし体験住宅」を10戸運営しており、民間の体験住宅とも協力しながら、多くの移住検討者を受け入れています。

また、専任の移住コンシェルジュを配置し、移住体験中のサポートをはじめ、移住相談や移住後のフォローまで、多様化するニーズにきめ細かく対応しています。

PR事業として、東京・大阪・札幌での移住イベントやオンラインイベントに積極的に出展しており、地域の魅力を発信し、移住検討者との接点を増やしたことで、移住体験の申込みや現地訪問の増加につながっています。

さらに、移住者や移住検討者との情報交換会「午後カフェ」などの定期開催のほか、移住支援団体や庁内関係部署と連携した農業ワーキングホリデーの実施、医療・介護・福祉の仕事相談会への出展など、幅広く事業を展開しています。

これらの取組により、2024（令和6）年度に8組14名が移住相談窓口を経て移住し、累計で63組117名の移住が実現しています。



午後カフェの様子

### 【基本目標3】 未来を担う若い世代の希望実現と親子の絆づくり

本町では、2005（平成17）年以降、死亡数が出生数を上回る「自然減」の状態が続いており、その傾向は今後さらに強まることが見込まれています。この状況を改善するためには、将来を担う若い世代が、希望を持って結婚し、安心して子どもを産み育てられる環境づくりが重要であると考え、ライフステージに応じた切れ目のない子育て支援に取り組んでいます。

#### <目標達成に向けた主な施策>

- (1) 安心して子どもを産み育てることができる環境の充実
- (2) 子育て支援の充実

#### <施策事例>

#### ○安心して子どもを産み育てることができる環境の充実－伴走型相談支援事業

2024（令和6）年4月に設置された「こども家庭センター（こ家セン）」では、妊娠前から子育て期に至るまで、切れ目のない相談支援を行っています。

不妊治療費等助成や妊婦健診交通費助成などの経済的支援と合わせて、親子（母子）健康手帳交付後には、担当保健師との定期的な面談の機会を設け、妊産婦への相談支援を強化しています。また、産後ケア事業や子育てリフレッシュ事業など、保護者の負担軽減につながる子育て支援事業を拡充したほか、昨年度からは、就学を見据えた相談の機会として5歳児健診を開始するなど、就学以降も支援できる体制づくりを進めています。さらに、随時の相談にも対応し、妊娠前から子育て期までの悩みに継続的に寄り添いながら、安心して子育てができるよう支援しています。



子育て相談の様子

#### 【基本目標4】 人口減少下でも心豊かに暮らせる地域づくり

長期的に続くことが見込まれる人口減少を見据え、今からその社会に適応し、地域に住み続けられるよう、行政サービスの維持や生活インフラの確保、買い物環境の整備など、住民の「暮らし」の観点による取組を進め、人口減少社会に適した地域づくりを進めています。

<目標達成に向けた施策>

- (1) 地域内公共交通の高度化
- (2) 行政サービスのデジタル化
- (3) まちなか居住・空き家対策の推進 など

<施策事例>

##### ○地域内公共交通の高度化－生活路線維持事業

人口減少が進行する中でも、暮らし続けられる地域づくりの取組として、持続可能な公共交通の構築に取り組んでいます。具体的な施策の一つとして、静内北部に位置する目名・田原・御園・豊畑・農屋地区（以下、対象地区）と静内市街地を結ぶデマンド交通「チョイソコしんひだか」の実証実験を2024（令和6）年10月1日から開始しました。

実施の背景には、人口減少に伴う利用者の減少や燃料費の高騰、さらには運転手不足などにより、公共交通を取り巻く環境が非常に厳しい状況にありました。それまで道南バス(株)が対象地区と静内市街地の間を

運行していた路線バス、「御園線」が2024（令和6）年9月末をもって廃止されることとなり、地域住民の移動手段を確保するため、デマンド交通を導入しました。

「チョイソコしんひだか」はAI技術を活用したオンデマンド型の交通システムで、静内高校に通う生徒専用の通学便（停留所と停留所を結ぶ定時定路線方式）と、一般の方が利用可能な昼間便（予約に応じて利用者宅と市街地停留所を結ぶドアtoドア方式）の2形態で運行しています。対象地区に住む高校生の通学の足を確保するとともに、地域住民の日常的な移動を支える交通手段として運行しています。

また、AIオンデマンドシステムを導入することにより、実証を通じて得られるデータを活用しながら、今後の交通施策の検討を進めていくこととしています。



「チョイソコしんひだか」の運行車両

#### おわりに

人口減少や少子高齢化の進行など、地域を取り巻く環境は今後さらに厳しさを増していくことが見込まれます。こうした状況の中でも、町民が安心して住み続けられる地域を守り、次の世代につないでいくことが大切であり、行政だけでなく、町民、地域、団体、企業、議会などと課題を共有しながら、連携して取り組んでいくことが重要です。

本町では、「みんなで作る希望にあふれるまち！」の実現に向け、地域とともに取り組んでいきます。

# ガストロノミックツーリズム in 北海道

～食と文化の観点から地域を見つめ、北海道を学ぶ旅～

## 第9話 「十勝」

遊佐 順和 (ゆさ よりかず)

公立大学法人旭川市立大学 地域創造学部地域創造学科 教授

東京都出身。北海道大学大学院教育学専攻修了。大学卒業後、日本フィルコン株式会社、池脇会計事務所、AIR DO北海道国際航空株式会社、株式会社ホテルオークラ札幌などの勤務を経て、2010年より札幌国際大学に奉職し、2025年より現職に就く。本務の傍ら、内閣府地域活性化伝道師、北海道住宅供給公社理事、旭川市工芸センター運営委員会委員、旭川市国際交流委員会委員、一般財団法人北海道開発協会評議員、一般社団法人和食文化国民会議全国「和食」連絡会議「和食」地域特派員なども兼務する。



今回は農業王国「十勝」の中心地帯<sup>おとふけ</sup>広市や音更町をご紹介します。十勝農業は1666(寛文6)年、松前藩が「ビロー場所」を設け、和人が十勝アイヌと交易を開始し和人による十勝開発が始まりました。その後、1869(明治2)年に開拓使が設置され、71(同4)年に静岡藩より農家数戸が入植、83(同16)年には静岡県より依田<sup>よだ</sup>勉三氏を中心とする「<sup>ばんせいしゃ</sup>晩成社」が帯広に入植し、本格的な十勝農業の幕開けとなりました。まちなかを流れる十勝川近くの中島公園には、依田勉三氏の銅像と晩成社の説明板が設置されています。公園の近くに、珈琲と充実したスイーツを提供するカフェや、至福の空間で本格的に紅茶を味わえる紅茶の店もあります。

帯広のまちなかで豊かな緑に囲まれる老舗銘宿の一つ北海道ホテルでは、<sup>しにせ</sup>煉瓦の外壁、木の温もりが溢れる趣深い<sup>しつ</sup>設えで、近代フランス料理の祖オーギュスト・エスコフィエの料理術や精神を伝える一般社団法人エスコフィエ協会より「<sup>はやま</sup>ディシプル(弟子)」の称号を受ける羽山正彦総料理長、大野<sup>こうじ</sup>公嗣洋食料理長などが腕を振るい、十勝食財の持ち味をあますことなく美しいスペシャルティの一皿に仕上げ提供されています。館内レストラン「<sup>おい</sup>バード・ウォッチ・カフェ」では、美味しい食事や珈琲をいただきながら、前庭を駆け回る可愛らしいエゾリスたちと出会うこともでき、ゆったりとした至福の空間で非日常のひとつときを紡げます。



東3南2 中島公園「依田勉三氏の銅像、説明板」



東3南3 CAFÉ GREEN「店舗入口、カフェラテ、スイーツ」



東1南3 DARJEELING「店舗外観、看板、ダーズリンティー」  
※本格的なアフタヌーンティーもいただけます



西7南1 森のスパリゾート 北海道ホテル「ホテル外観、チャペル、前庭を駆け回るエゾリス、洋朝食」

十勝の豊かな恵みが育む日本の銘菓

六花亭では、北海道の代表的な菓子といわれる「マルセイバターサンド」をはじめ、各種銘菓が全国から注目を集めています。バターサンドの包装には十勝開拓の先駆者、依田勉三氏が率いた晩成社のバターラベルのデザインが使われています。同社銘菓はパッケージは変わらずも、中身の菓子は常に原材料の配合、焼き加減はじめ細部に至るまで日々研鑽が積み重ねられ、進化し続けています。「お菓子は地域の文化」との考えのもと、同社では製菓とともに、中札内村の「中札内美術村」や庭園「六花の森」、札幌市の「ふきのとうホール」などの文化事業にも力を入れ、地元が誇りに思い、地域から愛される菓子店を目指しています。

十勝にはもう一つ北海道の代表的な銘菓に、音更町の柳月「三方六」があります。三方六は、薪を型取り、白樺のような美しい模様が描かれた縦型バームクーヘンで、俳優 森繁久彌氏（故人）が永年こよなく愛されたこともつとに有名です。「道の駅おとふけ なつぞらのふる里」とともに立ち並ぶ柳月スイート・ピアガーデンでは、広々とした店内に工場やカフェも併設され、三方六の商品誕生の沿革や製造行程を見学でき、工場直販ならではの三方六の端っこ（その日により時間や種類別に個数限定）や同店限定販売の商品を購入することもできます。

十勝名産の赤いダイヤと言われる「小豆」は、老舗和菓子店が数多くある京都でも、古都の食卓を彩る銘菓には十勝産小豆が重用されています。創業500年を数えわが国の代表的な和菓子店の虎屋では、和菓子の原材料には天然素材にこだわり、十勝産小豆は同社の代表的商品の羊羹や各種銘菓において、暖簾を支える非常に重要な一役を担います。



西2南9 六花亭帯広本店 「店舗外観、山岳画家 坂本直行氏が描いた山野草の紙袋とマルセイバターサンド、スイーツ」



音更町なつぞら1 柳月スイート・ピアガーデン 「工場外観（商品販売店、カフェも併設）、三方六の端っこ」



音更町なつぞら2 道の駅おとふけ なつぞらのふる里 「店舗看板、竹中ファームのリーキ（西洋ねぎ）」



京都市上京区一条通 虎屋菓寮京都一条店「店舗外観と設え、茶菓」



京都市下京区四条通 亀屋良長本店「店舗外観」  
（※同店に湧く名水「醒ヶ井水」を原材料の一つに京菓子を創作）

スロウフードを通じて「帯広の食<sup>ひも</sup>」を紐解く

帯広の取材時、友人知人に帯広ならではの味や、まちに欠かせない味を尋ねたところ、誰もが必ず名前を挙げる帯広スロウフードを幾つか探訪しました。

帯広といえまずは「豚丼」、甘辛いタレで焼かれた豚肉がたっぷりと熱々のご飯にのり、丼ぶりが登場しただけでもお腹も心も満たされます。豚丼は店舗も多く、各店とも独自のタレや調理法にもこだわりがあります。店舗やお弁当で購入して味わうこともでき、帯広を中心とする十勝の旅では定番の味わいです。

友人知人などに強く勧められ、地元の方々にとって欠かせない味という焼肉屋、まんじゅう屋に飛び込みで訪問しました。いずれも順番を待つ常連客に続く食事や購入となり、実際に喫食して素材にこだわるその味わいや手際よくきめ細やかな接客を受けて、永年にわたりこよなく愛される訳を実感しました。高橋まんじゅう屋さんでは、とても優しいご夫妻と歓談ができ、温かみ溢れる笑顔に安堵しながら、帯広まち並みの変遷やお客様の嗜好に至るまで時代の変化をととても丁寧に話してくださり、同店の暖簾の厚みを感じました。

インデアンカレーでは、一度食べるとリピートしたくなる味わいを実感するとともに、地元の方が鍋でカレーを買いに来るとい話を実際に拝見することもできました。カレーを食べ、同店のカレーは帯広を離れたみなさんが、地元に戻るとどうしても食べたくなる味であることも実感しました。もう一軒、ネパール人アディカル・アルジュン氏が営むネパールカレー「ビスターレ ビスターレ」もご紹介させていただきます。同店は現在、帯広を拠点に北海道とネパールの架け橋となるべく、「食」による経済活動も展開しています。アルジュン氏とは2001年大晦日<sup>おおみそか</sup>の



西1南10 帯広はげ天本店「店舗外観、豚丼」



大通南12 焼肉の平和園本店「店舗外観、平和園カルビ」



東1南5 高橋まんじゅう屋「店舗外観、お焼き」



西2南10 カレーショップインデアン まちなか店「店舗外観、インデアンカレー」



西19南2 ビスターレサティ「ネパールカレー、店内設え」



北海道新聞から、来日して留辺蘂町でホテル修業に勤しむ紹介記事を通じて知り合いました。大学の卒業旅行で首都カトマンズやその北方のランタン谷トレッキングで約1カ月ネパールに滞在しました。思い出の国から関心のあるホテル業界で一生懸命に頑張る彼に頑張してほしいとの思いから、ホテル業界でホスピタリティ関連の著書を多くもつ橋本保雄氏（故人・元ホテルオークラ副社長）の一冊に、手紙を添えてエールを贈りました。知り合った当時ホテルの一スタッフだった彼は、その後に網走で開業し、今や道内11軒の店舗と母国ネパールでも北海道の魅力を発信する飲食店を経営しています。最近では本別町産の大豆を使ったカレーメニューを開発し、十勝の食や自然と人の素晴らしさを世界へ発信しています。

### 十勝への深い愛情と熱いプライドが溢れるパン

全国で4分の1生産量を誇る十勝産小麦、その十勝産小麦100%のパン製造販売に取り組むますや満寿屋商店は、創業者の想いを受け継ぐ杉山雅則社長のふるさと十勝に対する深い愛情と熱いプライドが、同店のさまざまな種類のパンに込められています。十勝産の「ゆめちから」をはじめ、強力小麦でパンに向く「キタノカオリ」を主力に「春よ恋」「ハルキラリ」「ハルユタカ」、中力の「きたほなみ」など、地元産の小麦を用いたパンが同社各店舗に並んでいます。同社のパンは、十勝では農作業の合間に「おやつ」として親しまれ、十勝全域に広がりました。2009（平成21）年には、帯広市郊外に1万2千平方メートルの国内最大規模の広大な敷地を持つ販売店（ますやパン麦音店）をオープンし、パンの製造販売に加え食育や地産地消を学べる「食」の提案型事業も展開しています。同社ではさらに敷地を3万平方メートルに拡張し、ばん馬などと触れ合える馬牧場も併設し、パン窯も備えたイベント広場も整備することで、十勝ならではの「食」と「馬文化」の発信に力を入れる計画を進めています。

### 大地が育む食卓を支える恵みの由来に触れる館

ますやパン麦音店の隣には、日本甜菜製糖（株）のビート資料館があります。全国生産量100%を占める甜菜の北海道における栽培歴、各種資料や模型の展示とともに、甜菜輸送のために作られた私鉄・十勝鉄道の歴史に関する資料も展示されています。資料館の見学を通じて、私たちの食卓を支える大切な調味料の砂糖の歴史と今、これからの学ぶとともに、北海道の農業を下支えしている同社の数々の取組みを見つめることができるとも貴重な施設です。



稲田南8線西14 日本甜菜製糖（株）ビート資料館  
「施設外観、館内に展示される甜菜の模型資料」

### 北海道の大切なモノ・ヒト・コトを伝える杜

帯広では、株式会社クナウパブリッシングが同社編集の雑誌『スロウ』や、こだわりの逸品を販売する店舗スロウリビングを通じて、十勝をはじめ北海道の大切なモノ、ヒト、コトに関する情報が発信されています。同誌は北海道で想いをもって暮らす人々や、その方々が創るモノやコトをはじめ、北の大地が育む多くの煌めきをじっくり見つめることができます。

十勝を旅して大地の恵みと古を体感しませんか！



稲田南8線西16 ますやパン麦音店  
「店舗外観、十勝産の小麦・チーズにこだわったパン」



西16北1 株式会社クナウパブリッシング  
「スロウリビング店舗外観、雑誌『スロウ』の表紙」

## PMFの軌跡と理念 -札幌から世界、そして札幌へ-



### 桑原 辰徳 (くわはら たつり)

公益財団法人パシフィック・ミュージック・フェスティバル組織委員会 総務課長

札幌市生まれ。2008年、札幌市役所に入庁。病院局、区役所、危機管理対策室、総務局などでの勤務を経て、2025年4月より現職。現在は、法人の管理・運営に関わる幅広い実務を担当している。

### 1 札幌・北海道の夏とPMF -札幌に「世界の音」が集まる理由-

北海道の夏といえば、澄んだ空気、どこまでも広がる青空、そして涼しい風。そんな爽やかな季節に、札幌の街へ世界中から若い音楽家たちが集まってくる特別なイベントがあります。それが、パシフィック・ミュージック・フェスティバル札幌、通称「PMF」です。

1990年の第1回開催以来、PMFは北海道・札幌の夏の風物詩として市民に親しまれてきました。期間中は、世界各地から集まった若手音楽家たちによるコンサートが、札幌市内をはじめ道内各地で開催されます。ピクニック気分を楽しめる野外コンサートから、本格的なオーケストラ公演まで、クラシック音楽をはじめ聴く方にも気軽に楽しんでいただける公演が揃っています。

ただ、PMFが他のコンサートと一線を画するのは、その中心に「教育」があることです。出演する若い音楽家たちは、10倍を優に超えるオーディションの狭き門をクリアした精鋭たち。著名な演奏家・指揮者のもとで約1か月にわたり学びながら、舞台に立ちます。真剣に音楽と向き合うその姿もまた、PMFならではの魅力といえるでしょう。

次章では、PMFがなぜ札幌で生まれたのか、その歴史と理念をひもといていきます。

### 2 創設の経緯 -レナード・バーンスタインの意志-

PMFはひとりの音楽家の情熱から生まれました。アメリカ出身の指揮者・作曲家、レナード・バーンスタイン(1918~1990)です。PMFに息づくすべての理念は、彼の音楽への情熱と、教育への深い信念から始まっています。ミュージカル「ウエストサイド・ストーリー」の作曲者として広く知られる一方、20世紀を代表する指揮者として世界の音楽シーンに大きな足跡を残したバーンスタインは、優れた演奏家であると同時に、音楽教育にも情熱を注いだ人物として、後世にその名を刻んでいます。

晩年のバーンスタインが強く望んだのが、自らの残された人生を若い音楽家の育成に捧げることでした。ただ技術を磨くだけでなく、異なる文化や背景を持つ者同士が音楽を通じてつながり、互いを理解し合う、そのような場を世界に生み出すことがバーンスタインの切なる願いであり、その構想を形にしたのが



レナード・バーンスタイン



第1回PMFポスター

PMFです。

1990年、バーンスタインはロンドン交響楽団とともに札幌でPMFを創設し、自ら芸術監督として第1回の開催を実現させました。音楽祭の名称「パシフィック (Pacific)」には「太平洋」という意味に加えて「平和」という意味もあります。太平洋を囲む国々が音楽を通じてつながり、平和な世界を築いてほしい、そのようなバーンスタインの願いが、太平洋に面したアジアの都市、札幌への想いと重なりました。

しかし、バーンスタインはその第1回開催からわずか3か月後、1990年10月14日にこの世を去ります。第2回以降の開催が危ぶまれる中、同年12月31日にニューヨークで行われたバーンスタイン追悼演奏会の席上、板垣武四札幌市長（当時）がその意志を受け継ぐことを宣言。以来、PMFは「音楽の力で世界の若者をつなぎ、平和に貢献したい」というバーンスタインの想いを胸に、歩みを続けてきました。

それから35年余り。PMFは、これまでに世界79か国・地域から延べ約3,900名の若手音楽家を育て上げ、彼らは今、世界200以上のオーケストラをはじめさまざまな音楽の現場で活躍しています。バーンスタインが夢見た「音楽を通じた世界平和への貢献」という理念は、こうして今も世界中に響き続けています。

### 3 PMFの特徴 -教育を核とした国際音楽祭-

#### 3-1 世界三大教育音楽祭としてのPMF

PMFは、アメリカのタングルウッド音楽祭、ドイツのシュレスヴィヒ=ホルシュタイン音楽祭とともに、「世界三大教育音楽祭」のひとつに数えられています。いずれもバーンスタインにゆかりのある音楽祭であり、「音楽教育を通じて世界に貢献する」という

共通の理念のもとに結ばれています。PMFはこの2つと並び、世界的に権威ある教育音楽祭として高い評価を受けており、アジアを代表する教育音楽祭としてその役割を担っています。

単に「規模が大きい」「有名な演奏家がある」というだけでは、世界三大教育音楽祭には数えられません。教育プログラムの質と実績、そして音楽を通じた国際交流への貢献、それらが国際的に認められてこそ得られる評価です。PMFがこうした評価にふさわしい音楽祭であり続けるために、毎年積み重ねられる教育の営みこそが、その根幹を支えています。

#### 3-2 教育プログラムの仕組み

PMFの教育の中心を担う「オーケストラ・アカデミー」は、18歳から29歳までの若手音楽家を対象に、世界各地で行われるオーディションにより参加者が選抜されます。

アカデミー生への指導を担う教授陣も、世界最高峰の顔ぶれが揃います。会期前半は「PMFヨーロッパ」としてウィーン・フィルハーモニー管弦楽団やベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の奏者が、後半は「PMFアメリカ」として北米のメジャー・オーケストラの奏者が指導にあたる独自のカリキュラムは、それぞれの演奏スタイルや音楽的アプローチを短期間に体験できるPMFならではの貴重な機会です。

そして、出身も文化も異なる仲間たちと約1か月の共同生活を送り、言葉の壁を越えてひとつの音楽を作り上げるプロセスそのものが、アカデミー生にとって音楽家としての人間形成の場となります。



教育プログラムの様子

経済的な負担が原因で参加をあきらめることのないよう、PMF組織委員会が札幌までの渡航費、会期中の滞在費、一流教授陣の指導料を負担するなど、世界中の優秀な若者に等しく門戸を開くこの姿勢もまた、PMFが世界から信頼される教育音楽祭である理由のひとつです。

### 3-3 コンサートによる学びの実践

PMFのコンサートは、単なる演奏会ではありません。アカデミー生が日々の練習で培った技術と表現を、実際の舞台上で聴衆に届ける「学びの実践の場」です。真剣な眼差しで指揮者と向き合い、仲間と音を重ねるアカデミー生たちの姿には、完成されたプロの演奏とはひと味異なる、ひたむきな熱量があります。

多岐にわたる会期中のコンサートの中でも、芝生の上でクラシック音楽を楽しめる「ピクニックコンサート」は、クラシック音楽をはじめて聴く方にも気軽に足を運んでいただける名物イベントとして、またPMFと市民をつなぐ開かれた場として、長年にわたり愛され続けています。演奏会は道内各地でも開催され、普段クラシック音楽に触れる機会の少ない地域の方々にも、世界水準の演奏をお届けしています。PMFのコンサートは、教育の成果を発信する場であると同時に、北海道全体を音楽で満たす豊かな文化事業でもあります。

## 4 教育事業の成果と好循環

### 4-1 修了生の活躍

PMFで学んだ延べ約3,900名の修了生たちは今、世界200以上のオーケストラをはじめ、さまざまな音楽の舞台上で活躍しています。

しかし、PMFが目指す教育の成果は、修了生が世界に羽ばたくことだけにとどまりません。PMFの教育が生み出す好循環として特筆すべきが、修了生の「凱旋」です。PMF2024ではエリアス・グランディが、PMF2025ではカーリーナ・カネラキスとダヴィッド・ルンツが指揮者としてPMFに凱旋。さらに開催35回の節目を祝う「ホームカミング・オーケストラ演奏会」では、世界各地のプロオーケストラで活躍する修了生ら約40

名が集結し、PMFへの感謝と音楽への情熱を音に込めた演奏は、多くの聴衆の心に深く刻まれました。グランディはその後、札幌交響楽団の首席指揮者に就任。PMFを通じた縁が、札幌の音楽文化をさらに豊かにするかたちへと広がっています。

かつてアカデミー生として学んだこの地に、今度は世界を代表する音楽家として、指導者として戻ってくる、その姿こそが、PMFの教育が生み出す好循環を象徴しています。

### 4-2 地元・札幌への還元

PMFの好循環は、地元・札幌にも豊かな恵みをもたらしています。

「ミナミナコンサート」では、病院や福祉施設など、普段コンサートホールに足を運ぶことが難しい方々のもとへ、教授陣やアカデミー生たちが出向いて演奏を届けるアウトリーチ活動です。音楽を通じて人と人が直接つながるこの取組は、PMFが大切にしてきた「音楽の力」をまさに体現するものです。

また、「公開マスタークラス」や「オープンリハーサル」では、教授陣がアカデミー生を指導する様子やPMFオーケストラのリハーサルを間近で見学でき、本番に向けた音楽づくりの現場をリアルに体感することができます。小学生がPMFオーケストラと共演しながら音楽を学ぶ「リンクアップコンサート」、クラシック音楽を楽しく身近に学べる「PMFクラシックLABO♪」など、子どもから大人まで幅広い世代に向けたプログラムも充実しており、PMFは世界に開かれた教育音楽祭であると同時に、札幌市民の生活に深く根ざした文化事業でもあります。



子どもたちとのふれあい（リンクアップコンサート）

## 5 PMFを支える人々、北海道における文化資産としてのPMF

### 5-1 「聴く」「参加する」に加え、「支える」という関わり

35年以上にわたりPMFが開催され続けてきた背景には、音楽祭の理念に共鳴し、さまざまな形で支えて続けてきてくれた人々の存在が欠かせません。PMFへの関わり方は、コンサートを「聴く」だけではありません。「支える」という形の参加もまた、PMFをつくる大切な力のひとつです。

企業・団体による協賛、「PMFフレンズ（賛助会員）」への入会や個人寄付、アカデミー生の日本文化体験や会場でのグッズ販売などを担うボランティア、関わり方はさまざまですが、「世界から集まる若い音楽家たちを北海道で育てたい」「この音楽祭をこれからも続けてほしい」そうした一人ひとりの想いが、PMFの歩みを力強く後押ししています。

アカデミー生や教授陣にとっても、ボランティアとのふれあいは札幌での滞在を豊かにする大切な思い出のひとつになっています。



ボランティアとの方々との関わり（日本文化体験）

### 5-2 北海道遺産への認定『PMF～豊かな風土に根差した世界につながる教育音楽祭～』

2018年11月1日、PMFは「北海道遺産」に認定されました。

知床や釧路湿原といった雄大な自然、北海道開拓の歴史を伝える建造物が並ぶ中、国際的な教育音楽祭という「文化・教育の営み」が、北海道の風土や人々の

暮らしに深く根差した財産として認められたことはとても大きな意義を持ちます。

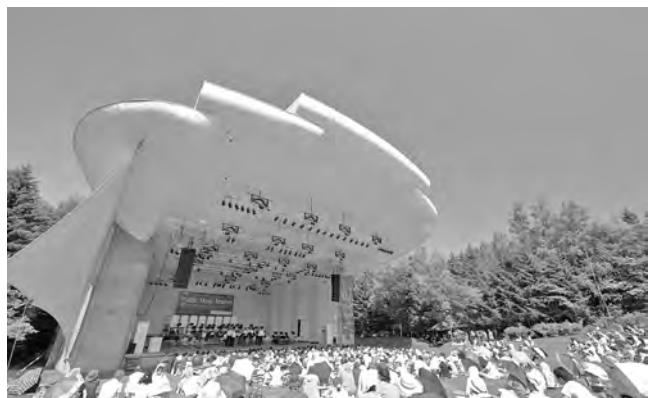
バーンスタインの理念のもとに生まれ、札幌市民をはじめ多くの人々の支えによって育まれてきたPMF。世界の若い音楽家を育て、その成果を地域に還元し、そしてまた次の世代へとつないでいく、その循環こそが、PMFが北海道の文化資産として認められた理由にほかなりません。

## 6 誰でも楽しめるPMFーあなたもこの夏、PMFへー

「クラシック音楽は難しそう」「コンサートホールは敷居が高い」そう感じている方にこそぜひ知っていただきたいのは、PMFにはクラシック音楽をはじめて体験する方でも気軽に楽しめるプログラムが数多く用意されているということ。

芝生の上にシートを広げ、お弁当を持ち寄りながら音楽を楽しむ「ピクニックコンサート」は、まさに夏のおでかけにぴったりのイベントです。「PMFクラシックLABO♪」では、PMFならではの切り口でクラシック音楽の新たな魅力に気軽に触れることができます。ドレスアップも、作法も、難しい予備知識も必要ありません。

次号（6月号）では、PMF2026の開催概要や注目の見どころ、チケットの購入方法や楽しみ方など、今年の夏をPMFとともに過ごすための情報をたっぷりとお届けします。ぜひ、この夏のおでかけ先のひとつに、PMFを加えてみてください。



青空の下でのピクニックコンサート

観光をフックに『一度きりで  
終わらない関係人口設計』を

**藤谷 周平 (ふじや しゅうへい) さん** プラスドライバー代表、birch株式会社取締役、一般社団法人道南地域おこし協力隊ネットワーク代表理事、一般社団法人北海道地域おこし協力隊ネットワーク理事、一般社団法人DSH社員

1995年愛知県生まれ札幌育ち。高崎経済大学地域政策学部で地域活性化・観光・まちづくりを専攻。東京で4年間人材会社の営業等を経て、2021年12月に八雲町へ。地域おこし協力隊任期中から廃校活用や観光事業に深く携わり、卒業後はbirch株式会社を設立。現在は道南・全道の協力隊ネットワーク運営など、OBとして協力隊員の支援活動にも尽力している。

北海道に移住 (U・I・Jターン) して、地域を巻き込む取り組みをする輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地方創生アドバイザー (総務省) のかとうけいこさん。39回目となる今回は、八雲町に1ターンし、地域限定旅行社、私設観光案内所、地域おこし協力隊支援、クリエイティブ支援などを行う藤谷周平さんにお話を聞きました。

### 移住のきっかけを教えてください

コロナ禍ですね。リモートワークが始まり、突然、東京の狭いワンルームが仕事場にもなり、プライベートと仕事場が一緒になり精神的に参ってしまいました。そして、次第に東京に居続ける必要はないのでは

ないかと考えるようになりました。いずれは北海道に戻りたいと考えていたので、このタイミングかなと思いました。北海道に戻るのなら、大学時代から取り組みたいと考えていた、まちづくりや地域に関わる仕事をしよう。そしてその場所は実家の札幌以外の町ならどこでもいいなという考えでした。

### 大学生の頃から、いつかは地方で！と考えていたとか

はい。2年生の時に群馬県桐生市にゼミでフィールドワークに入りました。地域の皆さんへのインタビュー、地域行事への参加、空き店舗を活用した期間限定の店舗運営などをさせてもらいました。まちづくりに魅力を感じ、地域の可能性を知り、いつかは“学びではなく仕事にしたい”と考えました。その頃、地

域おこし協力隊員という立場での関わり方や働き方もあることを知りました。ただ、当時は制度ができて5、6年目で、資格やスキルを持った即戦力になる人を地域の人は待っている。だから、自分はまだそのポジションには達していないので、一度社会に出て力をつけようと就職の道を選びました。

### 八雲町の募集要項に、ピンときたとお聞きしました

ミッションは「廃校を活用した『ペコレラ学舎』の運営。校舎をコワーキングスペースに、グラウンドをキャンプ場へと再生させる」と明確でした。そして、プロジェクトの方針は決まっているが、「立ち上げから関わってほしい」と僕には読めました。自由度と同時に任されている感があり、これだ、ここだ！と思いました。すぐに応募し合格しました。これもご縁だとすぐに引っ越してきました。

### 八雲町に来てみて、どうでしたか？

実際に暮らしてみると、自然が身近にありつつも、予想より田舎ではありませんでした。スーパーや病院など生活に必要な施設も整い、日常生活で不便はありませんでした。また仕事上、外から人を呼ぶことが多いので、特急が止まるマチ、高速のICもあるというのもありがたいです。都会ほどマチの規模が大きすぎないので、組織や地域の変化も割と見えるサイズ感もいいですね。

### 広域で活動をされていますね

着任1年半の2023年5月に「道南地域おこし協力隊ネットワーク」を立ち上げ、その代表を務めさせてもらっています。協力隊卒隊後も地域に定住するためには町内外の人脈が重要になります。そして、協力隊員同士が成功例や失敗例を共有することで、活動しやすい環境を作ることも必要です。行政区分にとらわれず、助け合うことで道南全体の発展につなげていきたいです。

その活動の一環として行っている「おむすびプロジェクト」では、道南各地の協力隊員が地元産の米や旬の食材を使っておむすびを作り、地域イベントで提

供しています。こうした活動によって、地元の皆さんに協力隊が何をしている人たちなのかがわかりやすくなりました。各地のイベントに出店することで、広域で活動するきっかけ、経験値を積むことにつながっています。「道南地域で活動したい協力隊を増やす」、そして「道南地域で活躍する地域おこし協力隊をより多くの方に知ってもらう」ために、さらに積極的に情報発信を行っていきます。

### 町の人に仲間にしてもらうための秘訣はありますか？

町に溶け込むための努力は惜しみません。誘いには基本的に断らずに顔を出し、町のお祭りにも参加するのは当たり前です。農家さんで人手が足りないと言われれば、すぐに駆け付けます。若さ、体力を惜しみなく提供しています。そういう姿を見てもらい、信じてもらって仲間に入れてもらっています。気が付くと八雲町を盛り上げたいと考えている地元の人とのつながりも増えてきました。

### 一度きりで終わらない関係人口とは？

観光でマチに来てくれた人（交流人口）を、継続的にマチに関わってもらう（関係人口）ために仕組みづくりを行っています。「ペコレラ学舎」では、旧校舎や旧教員住宅、サウナ小屋のDIYプロジェクトなどを通して、この5年間で延べで400人の人が関わってくれています。関係性ができると、リピーターになったり友だちを連れてきてくれたりと、八雲町に爪跡を残す人たちがじわじわと増えてきています。観光を入口にして、事業を核にして地域と人をつなぐ。そして、一度きりで終わらない関係性を築いていきます。

(2026年2月取材)

### インタビュー後記

協力隊卒隊後の2025年4月にオープンした「はちかん」。観光情報を発信するだけでなく、藤谷さんが地域限定旅行業務取扱管理者なので、八雲町と隣接地域の旅行を取り扱う「みなみ北海道旅行社」の営業所も兼ねています。ただこの場所は観光案内だけの場所ではなく、ここに来た旅人に町民がマチの魅力を話す語り部になって交流拠点にしたいと藤谷さんは願っています。そう遠くない未来にその夢が実現しそうな八雲町、目が離せません！

かとう けいこ (株)まちづくり観光デザインセンター代表

## 空き家を活用した地域おこし



岡田 大介 (おかだ だいすけ)

千葉県千葉市出身。四国学院大学卒業後、サッカー選手として高知ユナイテッドSCに2年間在籍。その後兵庫県淡路島のチーム、そして現在の十勝スカイアースへ移籍。社会人サッカークラブに所属しながら、2024年10月、幕別町地域おこし協力隊に着任。

### 【北海道へ移住】

私は幼少期からサッカー選手を目指しサッカー中心の生活を送ってきました。高校までは出身地である千葉県で過ごし、香川県にある四国学院大学へ進学した後、サッカー選手として高知ユナイテッドSCに2年間在籍し、そして兵庫県淡路島のチームへ移籍しました。移籍から1年半が過ぎた8月ごろに現在所属している十勝スカイアースからオファーをいただき、この移籍をきっかけに北海道へ移住することとなります。地域おこし協力隊の活動についてはクラブを通じて知りました。地方を転々としながら地域に溶け込むことには慣れていましたし、業務を通して地域の活性化に携われることに魅力を感じて応募したことが、幕別町地域おこし協力隊となった経緯です。

### 【地域おこし協力隊としての活動】

現在、幕別町には3名の地域おこし協力隊がいます。私の主な活動は町内の空き施設・空き家の増加を抑制し、地域の活性化を進めることです。当初は元理容室を改修した施設“幕理”で空き施設サポートセンターの運営を開始し、一年半で70件以上の相談を受け、そのうち11件が再生、活用に至りました。こうしてエリアに出来上がった点を面にし、さらに賑わいを創出するために、令和6年3月、元学習塾を改修した施設“幕練”に空き施設サポートセンターを移転しました。幕練の運営時間は、平日の13時～17時で、空き家に関する相談を受けるほか、町のインフォメーションスペースや、空き家から発生する使用可能な残置物をストックし、必要とする人に無償で提供する『マクベツジュンカン』というスペースの複合施設となっています。このような複合施設にリニューアルしたことにより、空き家相談だけではなく、地域課題の相談やときには世間話など、さまざまな目的で利用され、これまで町内外から200名以上の方が幕練にお越しただいて地域コミュニティの役割を担っております。

まだ、空き施設の再生・活用に関しては成果として出せていませんが、空き家の所有者に対してアプローチしたい思いがあったので「空き家コンサルタント」という資格を取得し、ワンストップで空き家相談を受けられるようにしています。空き家の相談は誰に頼ればいいのか分からない場合が多いので、そんな不安が出たときに私が窓口となり、さまざまな専門分野の方へ繋ぎ、活用に向けて一緒に解決することを目指して活動をしています。

また、自分のスキルや経験を活かして、運動指導や町内高校の講師など教育関係にも携わっています。幕練で相談を受けた地域課題のなかで、公共交通機関での移動が難しい地域では、子どもの数が少ないために運動する機会が極端に少ないという相談を受けました。私は現役スポーツ選手として運動する機会を子どもたちに与えたいという思いから地域の方と協議し定



## 北海道市民ファシリテータープラットフォームの取組み

NPO法人きたのわ

NPO法人きたのわは、2010年に任意団体として設立し、「自分たちのことを自分たちで話し合っ

て行動していける社会の実現」をビジョンに掲げ、北海道内でファシリテーションの講座や研修、対話の場づくり、ワークショップの設計や進行などを行ってきました。「自分たちのことを自分たちで話し合っ

て決めて行動していきたい人々に、話し合いの方法と共に行動していける一歩を届ける」を私たちのバリューとして、10年以上にわたり北海道各地で話し合いの場づくりを行い、行政や地域組織、中間支援団体とのネットワークを築いてきました。しかし、その多くは単発的な開催で終わってしまい、「本当に地域が変わっていくことにつながっているのだろうか?」「講座後も継続して実践し続けられる場や機会が地域にないと途絶えてしまう」といった継続的な実践や学びの仕組みにつながらないという課題を感じるようになりました。

### 【市民ファシリテーターとは】

そのようなときに、市民が自ら育ち続ける仕組みとしての「市民ファシリテーター」の取組みと出会いました。

「市民ファシリテーター」という言葉を聞いたことがありますか? プロの進行役やまちづくり専門家ではなく、地域に暮らす人たちが話し合いの場にファシリテーションの視点を持って参加したり、少人数での話し合いの進行や板書などを実践する人を市民ファシリテーターと呼んでいます。また、話し合いの進め方だ



芽室町での講座の様子

けではなく、自治や協働の視点を持ちながら話し合いに関わる存在でもあります。

これまで、恵庭市・芽室町・中標津町・上富良野町・新ひだか町・室蘭市・ニセコ町などで市民ファシリテーターを育成する取組みが行われてきました。住民一人ひとりが地域の困りごとを「自分ごと」として捉え、対話を重ねながら行動する文化を広げることは、行政に依存しすぎない持続可能なまちづくりにつながります。このような市民ファシリテーターの考え方や役割は、これまで北海道に限らず全国各地の自治体においても先駆的に実践されてきました。

### 【北海道市民ファシリテータープラットフォームができた背景】

北海道での市民ファシリテータープラットフォーム立ち上げの取組みは、静岡県牧之原市において「まちづくり協働ファシリテーター」(市民ファシリテーター)が地域の中で制度として定着し、継続的に機能している実践を知ったことをきっかけに始まりました。「市民自治」や「協働」と「ファシリテーション」が継続してまちづくりにつながっているヒントがそこにありました。

牧之原市では市民ファシリテーターのグループが立ち上がり、市民が行政と協働して対話を通じて地域に主体的に関わり続ける仕組みが根づいている姿から、北海道においても同様に、単発的な研修にとどまらない継続的な学びと実践を支える仕組みが必要であると強く感じて、「これは北海道で私たちがやるべきことではないだろうか?」と団体の中で話し合い、2021年には4つの地域チームとともに「北海道市民ファシリテータープラットフォーム」(以下、プラットフォーム)を設立しました。

プラットフォームでは、各地域から講座プログラムや資金調達に関する相談、各地の事例共有などを行った

ク形成を進めてきました。こうした実践を通じて、地域ごとの異なる経験や実践を持ち寄って、人材育成だけでなく、情報・ノウハウ・資金調達の知見なども含めて共有できる北海道全体で市民ファシリテーターの学びと実践を支える基盤づくりを進めています。

北海道は広く、人口規模や地域の状況もさまざまです。そのため、どこか一つのモデルをそのまま広げることが難しく、それぞれの地域に合った形で取り組みが生まれていくことが重要だと考えています。プラットフォームの役割は、その実践を一方向的に指導することではなく、自分の地域で市民ファシリテーターの仕組みを作りたい組織や個人がつながり、各地で生まれている知恵や工夫を交換したり、互いに学び合える場をつくりながら、市民主体の対話によるまちづくりの必要性を発信することを目的としてきました。



全道フォーラムの集合写真

### 【これまでの成果と見えてきた課題】

これまでプラットフォームでは、市民ファシリテーターという考え方や実践を全国全道に発信してきました。そこで出会った「自分たちの地域でも取り組んでみたい」という人達に最初の一歩を伝えていくために『自分たちの住むまちで市民ファシリテーターをはじめよう！ガイドブック』を作成しました。

ガイドブックを通して少しずつ取り組む地域が増え、それぞれの地域性や状況に耳を傾けながら伴走支援を行ってきました。こうした積み重ねが、現在の道内各地における市民ファシリテーターの広がりにつながっていきました。

一方で、今後もさらに取り組みを広げていくためには、これらの実践を全道的に共有・蓄積していく、公共性の高い取り組みとして位置づけていくことが必要

です。市民ファシリテーターの取り組みは、地域の話し合いの場を支え、合意形成や協働を促す役割を持つものです。こうした機能は、地域づくりや行政施策を進めていく上でも重要な基盤となります。その意味でも、この取り組みを個々の市民活動にとどめるのではなく、地域社会全体で支え、持続可能な仕組みで育てていくことが求められています。

### 【市民ファシリテーターの取り組みを地域の力に】

北海道では少子高齢化や社会経済情勢の変化、個人の価値観やライフサイクルの多様化に加え1999年地方分権一括法の施行など、これまでの行政主導のまちづくりから市民の意思に基づいた市民主体のまちづくりへの変化が求められています。

“住民参加”や“協働”が求められる一方で、市民からは意見がどう汲み上げられるのかが見えづらく、行政からは何から始めたらいいのかわからないなど、思うように進まない現状が聞こえてきました。これまで行政が中心的に担ってきたまちの課題や将来について、暮らしの主体となる市民が自分ごととして、まちのことを考える機会をどう作ることができるのかが大きなテーマとなります。

地域の人がまちの話し合いの場に、“ファシリテーションの視点”を持って参加したり場を作っていくことは、「自分たちのまちのことを自分たちで話し合い決めて行動していける」という市民自治につながるものと考えています。

あなたの住むまちで市民ファシリテーターと一緒に始めてみませんか？



▶自分たちの住むまちで市民ファシリテーターをはじめよう！ガイドブック販売中

<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSflzxHJ1jQ8Jf1mHfrte0HXDxKxyKJkQILONGjXpeC9xiDOIQ/viewform>



▶NPO法人きたのわ HP <https://kitanowa.net/>

# ザンビアについて



## 塩田 久朗 (しおた ひさお)

前・ザンビア日本国大使館 経済開発協力班  
国土交通省北海道開発局札幌開発建設部札幌道路事務所  
道路施工保全官

1997年北海道開発局入局。主に道路部門で勤務。2023年1月から在ザンビア日本国大使館に勤務し、経済協力などを担当。2025年4月より現職。

## はじめに

私は、2023年1月から2025年3月までの2年3か月間、ザンビアの首都ルサカにある在ザンビア日本国大使館に勤務していました。担当は経済開発協力班で、インフラ、鉱業、電力分野などを担当していました。日本からザンビアへの直行便はなく、成田空港から乗り継ぎを含めると、所要時間はおよそ24時間に及びます。本稿では、私が当地で担当していた業務や生活について紹介します。



ザンビア（首都ルサカ）の位置図

## ザンビアの概要

ザンビアの国土面積は752,612km<sup>2</sup>（日本の約2.2倍）で、コンゴ民主共和国、タンザニア、マラウイ、モザンビーク、ジンバブエ、ボツワナ、ナミビア、アンゴラの8か国と国境を接する内陸国です。国土の大部分は標高800m以上の高原地帯に位置しています。

人口が集中している地域は、首都ルサカ周辺、南部州リビングストーン市周辺、鉱山地帯であるコッパーベルト地域です。気候は亜熱帯に属し、首都ルサカ（標高約1,300m）では、以下の3つの季節に分けられます。

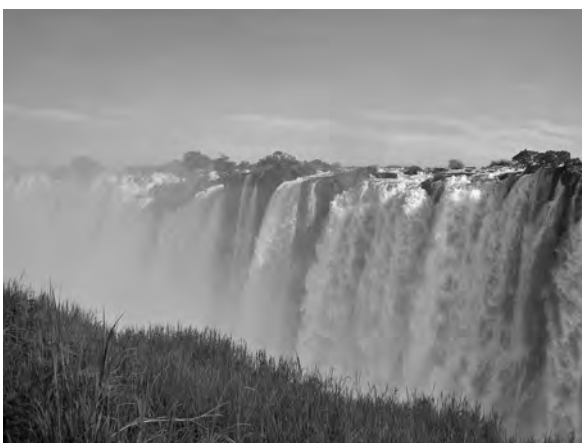
- ① 涼しい乾季（5月～8月）：平均気温は18度前後。7月が最も寒く、朝の最低気温が10度を下回ることもあり、暖房が必要な日もあります。

- ② 暑い乾季（9月～11月）：平均気温は23度前後で、35度を超える日も多く、直射日光は強いものの乾燥しており、朝晩は涼しく、日本の夏より過ごしやすくと感じられます。
- ③ 雨季（12月～4月）：平均気温は21度前後。日本の梅雨とは異なり、短時間の激しいスコールの後に晴天となることが多く、比較的涼しく感じられます。

人口は2021年時点で1,892万657人（世界銀行）とされ、増加傾向にあります。2000年は約1,058万人、2010年は約1,391万人、2015年は約1,621万人でした。平均寿命は、1996年には42歳まで低下しましたが、その後改善し、2014年には60歳、2017年には62歳、2020年には64歳となっています。

民族は公式には73民族が認定されており、主要民族としてはベンバ、トンガ、チェワ、ロジ、ンセンゲなどが挙げられます。これに加え、欧州系（白人）やインド系の住民も居住しています。言語は公用語である英語のほか、各民族がそれぞれの言語を使用しています。

国民性は一般に温厚で辛抱強いとされ、独立後は南部アフリカ地域における植民地解放闘争を主導・支援してきた歴史があります。また、内戦やクーデターの経験がないことから、政情が不安定な周辺国に対して相対的な安定性への誇りを持つ傾向も見られます。



ビクトリアの滝

主要産業は銅鉱業で、総輸出額の約7割を占めています。そのほかの輸出品としては、メイズ（トウモロコシ）、綿花、花卉、タバコ、宝石などがあります。銅（地金）の生産量は世界第11位、コバルトは第9位（JOGMEC、2018年）であり、鉱物資源供給国としてのポテンシャルは非常に高く、世界各国の鉱山企業が投資を行っています。

ザンビアの電力供給は9割以上が水力発電によるもので、総発電容量は約2,700メガワット（MW）です。観光資源としては、世界三大瀑布の一つであるビクトリアの滝（ザンビア唯一の世界遺産）をはじめ、20の国立公園と36のサファリ管理地域があります。これらの地域は国土の約30%を占めています。2014年の外国人観光客数は約95万人で、その約半数がアフリカ諸国からの訪問者であり、次いで米国、英国、中国からの観光客が多くなっています。



シマウマ

### ザンビアと日本の関係

日本との関係では、2009年7月に石油天然ガス・金属鉱物資源機構（JOGMEC）が、鉱山・鉱物開発省及び商業・貿易・産業省との間で包括的覚書を締結しました。2018年5月には、日アフリカ経済フォーラムの機会に協力文書が署名され、2023年8月には、探査分野などの協力強化に係るMOUが、西村経済産業大臣とカブスウェ鉱山・鉱物開発大臣の立ち会いのもとで署名されました。

## 北海道とザンビアの関係

北海道とザンビアの関係も深く、北海道大学とザンビア大学は、1985年にザンビア大学獣医学部（UNZA-Vet）が開校されて以来、共同研究や人材育成などの交流を長年にわたり続けてきました。

## 在外公館の仕事

在外公館の仕事は、外交活動の最前線で行われ、日本と相手国との政府間交渉、日本の利益を守るための情報収集、日本人の保護、文化交流、経済協力など、多岐にわたります。主な業務内容としては、相手国政府との関係構築、広報・文化交流の推進、現地における日本人の安全確保や支援、開発協力の実施・支援などが挙げられます。

## 日本の経済協力

私は経済開発協力班に所属し、主に経済協力を担当していました。ザンビアに対する日本の経済協力は、1970年のJOCV（青年海外協力隊）派遣に始まり、1972年の円借款、1980年の無償資金協力へと展開してきました。対象分野は、運輸交通、水、電力といったインフラ分野のほか、民間セクター開発、農業、保健、教育など多岐にわたります。

円借款については、ザンビアが拡大HIPCイニシアティブの完了時点で達したことを受け、2008年に17年ぶりに再開されました（電力アクセス向上計画）。近年では、総人口の約7割を占める農業従事者や中小企業を中心とした製造業の底上げ（民間セクター開発）、成長を支えるインフラ整備・強化、教育・保健・地方給水といった社会基盤整備や人材育成のための環境整備支援が行われています。

## 滞在期間中の要人訪問について

私が勤務していた期間中、2023年8月には西村経済産業大臣のザンビア訪問がありました。西村大臣はヒチレマ大統領を表敬訪問し、カブスウェ鉱山・鉱物開

発大臣との間で「鉱物分野における協力に関する共同声明」に署名しました。また、JOGMECと鉱山・鉱物開発省との間で締結された、探査分野などの協力強化に係る覚書の署名にも立ち会いました。

さらに、日ザンビア鉱業投資ラウンドテーブルが開催され、日本企業11社の幹部が同席する中、ザンビアへの投資実現に向けた率直な意見交換が行われました。

## ザンビアでの生活について

アフリカと聞くと、砂漠が広がり一年中暑いというイメージを持つ方も多いかもしれませんが、ザンビアには雪こそ降らないものの、涼しい時期もあります。

食文化については、ザンビアの主食は「シマ」と呼ばれ、メイズ（トウモロコシの粉）をお湯で練ったものを、肉やおかずと一緒に食べます。電力事情としては、赴任1年目に雨季の降雨量が少なかった影響で、水力発電に依存するザンビアではカリバダムの水量が不足し、2年目には最大で1日20時間に及ぶ計画停電が実施されました。照明も使用できず、ろうそくを使って生活していた時期もありました。

2024年11月には日本食レストランがオープンし、牛丼、唐揚げ、とんかつなどの日本食を味わえるようになりました。それ以前は日本食レストランがなく寂しさを感じていましたが、中国人やインド人が多く居住しているため、中華料理やインド料理は比較的容易に



ザンビアの主食「シマ」

食べることができました。ファストフード店も多く、ハンバーガーやピザのほか、ケンタッキーフライドチキンもザンビアで楽しむことができます。現地で人気のファストフードチェーンには「ハングリーライオン」や「ナンドス」があり、いずれも非常に美味しかったです。

日本酒は現地では入手が難しい一方、南アフリカ産のワインは安価で品質も良く、よく飲んでいました。

休日には、世界三大瀑布の一つであるビクトリアの滝を訪れ、「デビルズ・プール」と呼ばれる滝の上の天然プールで写真を撮るなど、スリリングな体験もしました。また、ボツワナのチョベ国立公園では、野生のゾウ、ワニ、カバ、キリン、ライオンなどを間近で見ることができました。そのほか、南アフリカのケープタウンを訪れるなど、普段ではなかなか行くことのできない場所への旅行も経験しました。



ビクトリアの滝（虹）



喜望峰

## おわりに

私が赴任していた2年余りは、コロナ禍が明け、日本からの出張者が増加していた時期でもありました。西村経済産業大臣をはじめ、ODA調査団（舞立議員、青山議員）、AU議連の訪問、ヒチレマ大統領の訪日、カブスウェ鉱山大臣の訪日など、要人関連の対応が数多くありました。

また、「草の根・人間の安全保障無償資金協力」事業も担当し、予算規模は小さいものの、地方における学校や病院建設の支援に携わり、地方出張も多く経験しました。首都ルサカとは異なる地方の生活の様子を知ることができ、非常に貴重な経験となりました。

海外生活では、日本とは大きく異なる環境の中で、食文化の違い、タクシーを呼んでもなかなか来ないこと、ATMでの現地通貨の引き出し方など、日本では想像しにくい苦勞も多くありましたが、それらを含めて非常に有意義な経験となりました。

この2年3か月の間、仕事面・生活面の両方で支えてくださった関係者の皆様、上司、JICAの方々にご心より感謝申し上げます。



草の根集合写真

## 炭都の娘はうたごえに乗って ドンと掘れ黒ダイヤ 夕張娘



山中 憲治 (やまなか けんじ)

1949年小樽市生まれ。72年北海道大学法学部卒。同年北海道開発庁（現国土交通省）入庁。建設省（当時）建設振興課長補佐、北海道開発局総務課長などを経て、北海道開発局開発監理部長で退官。その後（財）北海道河川防災研究センター（現（一財）北海道河川財団）、北海道建設業信用保証（株）に勤務し、20年退職。東京都在住。

### 1 夕張娘と炭鉱

「夕張娘」？ 電器屋さんのお嬢さんで、とんねるずの「雨の西麻布」に出てきた双子のリリーズ？ 「好きよキャプテン」。この曲を覚えている方もおられるだろうけれど、残念ながらこのお二人のことはない。

「夕張娘」は炭住に暮らす娘達の歌なのだ。

石炭は自前で賄える貴重なエネルギー源だった。

そして、石狩炭田は常磐、筑豊と並ぶ三大産地で、北海道は日本の石炭埋蔵量の半分を占めていたから、初期の北海道総合開発計画の柱でもあり、昭和30年代に小学生だった私は、社会科で、北海道の炭田は石狩炭田（南の空知炭田と北の夕張炭田とに分かれていた。）、留萌炭田、天北炭田、釧路炭田と習ったものだ。

石狩炭田は日本最大の炭田だった。

当時私の住んでいた市に炭鉱は無かったが、石狩炭田から石炭を運んできた貨車が船積みを待って埠頭に列をなしていたし、一流企業だった北炭（北海道炭礦汽船）の出先もあり、同級生が住むその社宅は立派で、服装からしてその他大勢とは異なっていたから、石炭の威力は子どもにも分かり易かった。

### 2 うたごえ運動

関鑑子という名を聞いたことがおありだろうか。

うたごえ運動の指導者で、戦前からプロレタリア活動家として有名だった声楽家（1899～1973）である。

うたごえ運動（「歌声」ではないのは、当時の勤労青年の誰もが読めるようにという趣旨）は、日本共産党の大衆社会運動として出発しており、その下部組織が作った「日本青年共産同盟中央合唱団」（1948.2関鑑子が指揮者）が母体であるが、同合唱団は1951年に「中央合唱団」と改称している。

強権的な戦時社会体制や悲惨な戦争の記憶が国民の多くに肉体化されていた時代だ。

反戦平和の歌を多く含むのは当然として、戦時の抑圧への反動から享楽性に満ちていた流行歌や敗戦日本の劣等感を掻き立てるような進駐軍の音楽などとは異なる新しい歌や、生活に根ざして親しまれてきた民謡も多く取り上げられた（NHKのラジオ歌謡や文部省唱歌も一部含まれている）。

全国うたごえ協議会による運動は現在も存続しているが（狭義の「うたごえ運動」はこれを指す）、運動は昭和30年代までが全盛で、全国の職場や、学校、地域に合唱サークルがあった。

一方、街でもいろいろな歌を歌いたいという人達は当然いるわけで、仲間同士の合唱の範囲を超えて集う歌声喫茶が各地に誕生する。

歌声喫茶は、主にアコーディオンを弾く歌唱リーダーの指導の下に客が合唱する喫茶店で、ススキノにあった歌声ピアホール「ローレイ」(ご存じない?)の喫茶店版と考えて貰えば分かりやすい。有名な東京新宿の「灯」の他<sup>1)</sup>、「カチューシャ」「トロイカ」などの名の店が全国各地にあった。勿論、道内にも。

歌手のさとう宗幸や故上条恒彦はこの歌唱リーダー出身だ。

中央合唱団は、1952年に来道し石狩炭田の各炭鉱で歌唱指導を行っている。

炭鉱の全盛期であり、合唱の集団性もあって、うたごえ運動は労働運動と結びつく。北海道炭労(炭鉱労働組合)主催による第1回「北海道炭鉱のうたごえ」は、1955年、美唄市の三井美唄互楽館(炭鉱全盛期を反映する道内最大級の劇場で、この年の新築。現存)で開催され、他産業からも参加している。

当時の炭鉱は、北海道労働運動の中核だっただけではなく、文化活動の中心でもあった。

### 3 青年歌集

うたごえ運動は、合唱を初心者にも分かり易く普及させたことや各地への巡回指導に特徴があったが、もう一つの特徴が「青年歌集」の発行である。

中央合唱団とは別に行われていた「みんなうたう会」での歌をまとめ、1949年に発行されたものを基に、1951年に第1篇が刊行されると忽ちベストセラーとなり、第10篇まで出版された(他に特集篇がある)。

小さな歌集で、表紙では如何にも勤労青年・学生という感じの人々が歌っている。

時代の雰囲気なのだろう、今見ると、あるべき民衆像というか純朴さと生真面目さ満開である。

多くの人がこの歌集を手にとっていたのだ。



青年歌集第1篇 音楽センター  
1953改訂版発行 1961年再版  
(筆者蔵)

掲載されている歌は、民謡(世界・日本)が一番多く、次に反戦歌、労働歌や世界の歌曲が並ぶ。

共産主義・社会主義運動色が濃いのが、次第に日常生活を題材とする歌が増えていく。

「民族独立行動隊の歌」など民族意識と闘争心の高揚を訴える日本の創作曲は、今聞いてみると、戦時中までの愛国歌謡と底辺で繋がって

いるような歌詞とメロディー。

戦時中に国民を慰撫・鼓舞する健全娯楽として当局御用達だった音楽(「厚生音楽」という<sup>2)</sup>)に繋がるような歌や、厚生音楽のポスターと似ている表紙など、「健全な音楽」による社会運動の底流はなかなか変わらないものだと感じさせられる。

一方、歌声喫茶では独自の歌集が発行された。こちらは、より広範な歌が載っていて、店によっては歌謡曲まで掲載されていた。



新宿と渋谷にあった歌声喫茶「カチューシャ」(1955開店)の歌集 1959発行 (筆者蔵)

へ起て飢えたる者よへの「インターナショナル」から、へここは御国を何百里への「戦友」まで、カオス状態

#### 4 「夕張娘」

さて、お待たせの「夕張娘」。

売れに売れたという青年歌集第1篇収録の日本曲2 (日本曲1は民謡) のトップが、「夕張娘」だ。

因みに日本曲1のトップは「ソーラン節」なので、北から順に並べただけかもしれないが…。

地しき根國のたむけに……1 若者……5 珠母の神……8 アメリオ曲……7 赤い……9 ストロ……10 もらい……12 空……13 ティン……14 赤い……15 赤い……16 赤い……17 赤い……18 赤い……19 赤い……20 赤い……21 赤い……22 赤い……23 赤い……24 赤い……25 赤い……26 赤い……27 赤い……28 赤い……29 赤い……30 赤い……31 赤い……32 赤い……33 赤い……34 赤い……35 赤い……36 赤い……37 赤い……38 赤い……39 赤い……40 赤い……41 赤い……42 赤い……43 赤い……44 赤い……45 赤い……46 赤い……47 赤い……48 赤い……49 赤い……50 赤い……51 赤い……52 赤い……53 赤い……54 赤い……55 赤い……56 赤い……57 赤い……58 赤い……59 赤い……60 赤い……61 赤い……62 赤い……63 赤い……64 赤い……65 赤い……66 赤い……67 赤い……68 赤い……69 赤い……70 赤い……71 赤い……72 赤い……73 赤い……74 赤い……75 赤い……76 赤い……77 赤い……78 赤い……79 赤い……80 赤い……81 赤い……82 赤い……83 赤い……84 赤い……85 赤い……86 赤い……87 赤い……88 赤い……89 赤い……90 赤い……91 赤い……92 赤い……93 赤い……94 赤い……95 赤い……96 赤い……97 赤い……98 赤い……99 赤い……100	日本曲1……1 日本曲2……2 日本曲3……3 日本曲4……4 日本曲5……5 日本曲6……6 日本曲7……7 日本曲8……8 日本曲9……9 日本曲10……10 日本曲11……11 日本曲12……12 日本曲13……13 日本曲14……14 日本曲15……15 日本曲16……16 日本曲17……17 日本曲18……18 日本曲19……19 日本曲20……20 日本曲21……21 日本曲22……22 日本曲23……23 日本曲24……24 日本曲25……25 日本曲26……26 日本曲27……27 日本曲28……28 日本曲29……29 日本曲30……30 日本曲31……31 日本曲32……32 日本曲33……33 日本曲34……34 日本曲35……35 日本曲36……36 日本曲37……37 日本曲38……38 日本曲39……39 日本曲40……40 日本曲41……41 日本曲42……42 日本曲43……43 日本曲44……44 日本曲45……45 日本曲46……46 日本曲47……47 日本曲48……48 日本曲49……49 日本曲50……50 日本曲51……51 日本曲52……52 日本曲53……53 日本曲54……54 日本曲55……55 日本曲56……56 日本曲57……57 日本曲58……58 日本曲59……59 日本曲60……60 日本曲61……61 日本曲62……62 日本曲63……63 日本曲64……64 日本曲65……65 日本曲66……66 日本曲67……67 日本曲68……68 日本曲69……69 日本曲70……70 日本曲71……71 日本曲72……72 日本曲73……73 日本曲74……74 日本曲75……75 日本曲76……76 日本曲77……77 日本曲78……78 日本曲79……79 日本曲80……80 日本曲81……81 日本曲82……82 日本曲83……83 日本曲84……84 日本曲85……85 日本曲86……86 日本曲87……87 日本曲88……88 日本曲89……89 日本曲90……90 日本曲91……91 日本曲92……92 日本曲93……93 日本曲94……94 日本曲95……95 日本曲96……96 日本曲97……97 日本曲98……98 日本曲99……99 日本曲100……100
---	--

青年歌集第1篇の目次右ページ左下側に「夕張娘」

インターネットで「夕張娘」を検索しても、リリースの他には「黒ダイヤばやし」(「ツヤの良いのが自慢だよ 夕張娘と黒ダイヤ〜」)が出て来るだけ。

市制50周年・開基105年記念というレーザー・ディスク!の12曲にも、「ゆうばり小唄」から「新ゆうばり音頭」までで「夕張娘」は無い。

今でこそ人口は6,000人に激減しているが、最盛時に24の炭鉱があり、1960年に11.7万の人口を数えた市だ。娘さんの残り香位はありそうなものではないか。「青年歌集」からみてみよう。

- 夕張娘は笑顔が上手  
炭鉱がえりの三人娘 くくりあご<sup>3)</sup>して片笑くぼ  
黒いダイヤを掘る若者の  
胸にもたれているせいか  
夕張娘は笑顔が上手
- 夕張娘はお色が白い  
鉱夫長屋でふりむく娘 おやじ先山<sup>4)</sup> 乱暴もの  
大熊ひぐまの出る山道で  
白樺ながめて育つたせいか (ママ)  
夕張娘はお色が白い
- (略)

当時の炭坑労働歌は地元炭鉱マンの作が主流だったので<sup>5)</sup>、夕張の炭鉱マンが作った歌かと想像していたが、作詞は「若者よ」で知られる“ぬやまひろし”、作曲は戦前から活躍していた“大木正夫”だ。

「青年歌集」は楽譜も載せていて、誰でも歌い易いように数字譜<sup>6)</sup>も出ている。

現代の目からは歌詞にジェンダー問題が濃厚な点は措くとして、熊(3番には雪)が出ては来るが、夕張固有の地名や行事などは無くご当地性が薄いことと、炭鉱や炭住を舞台にしているのに労働・生活の匂いに乏しい感は否めない。



五線譜の下が数字譜

全国を席捲した運動の最初の歌集に収められていたのに、忘れ去られたこの歌。

うたごえ運動初期の歌にしては平穏な日常性色が強いのは、イデオロギーそのままに堅苦しい闘争の歌の息抜きを狙ったもののように見える。

日本の復興を担う三大産炭地の炭坑節で、座敷歌として洗練され、1946年から放送されたNHKのラジオ番組「炭坑に送る夕<sup>ゆうば</sup>」で全国ヒットしていた筑豊<sup>7)</sup>と常磐の炭坑節に比べ、レコード化前の北海炭坑節(北海盆歌)は卑猥さが特徴だったから、健全な歌の世界には出て来られない<sup>8)</sup>。

こうなると(勝手な想像になるが)、誰もが口にできる北海道の炭鉱の歌が欲しくなるのは自然な流れではないだろうか<sup>9)</sup>。

北海炭坑節とは名前の重なりを避け、民謡ではないものの民衆の生活に根ざした楽しい歌として作られた北海道の炭鉱の歌が「夕張娘」なのではないか。

前述のとおり夕張を舞台にした歌詞が無いので、炭鉱の町「芦別」でも「赤平」、<sup>あしべつ</sup>「三笠」でも良かったように見えるが、作詞・作曲者にとって、夕張炭田の炭

都夕張こそ北海道の炭鉱の象徴だったのであろう。

夕張は代表的産炭地で大都市、しかも、空知炭田に所在する町々とは異なり、炭田名=都市名である。

歌の名にふさわしかったといえる。

しかし、この歌は特定の運動に伴う創作曲だということと「夕張」という固有名詞のタイトルが仇になってつぶしが効かなかったことに加えて、北海道の炭坑節が数年後に猥歌色を消した上、炭鉱までも除いた盆踊り歌に大変身することで全国ヒットしたのが、その後の運命の差に繋がったといえるかもしれない。

北海道では、炭鉱の閉山は地域社会の消滅に直結することが多く、地域にはほぼ何も残すことは無かった。

殆どの人にとって、炭鉱は遺構で面影を偲ぶだけの存在になってしまっただろうが、文化運動という遺産を残したことを忘れてはならない。

現在、炭鉱の歌は、地元の盆踊りなどで歌い継がれているだけだが、かつては一般的な歌だった<sup>10)</sup>。

ヘルメットにヘッドランプ、炭塵で真っ黒の顔に眼だけが光っているというイメージの内側には、豊かな精神世界が広がっていたのだ。

うたごえ～歌声が退潮していったのは、政治の季節が終わったからというより、一緒に歌う場、集う場を求める共通の想いが失われていったことによるものだろう。集団の時代の終りである。

カラオケに集まっても、歌うのは個人なのだ。

ところが、今、なぜか歌声喫茶の復権現象が起きている。定席は少なく、多くは曜日限定だが、昭和ノスタルジーというより、個の時代を通ったうえで、集団の楽しさ、人との触れ合いを求めていることの反映だろうと思える。

どの世界にもあることだが、良い歌だからといって、広く親しまれ歌い継がれていくとは限らない。

残念ながら「夕張娘」は、炭鉱の歌に関する著作や

CD等にも収録されておらず、この黒ダイヤは埋もれたままだ。

もし、夕張ゆかりの人の心にワンフレーズだけでも流れることがあれば、くくりあごの娘さんが夕張岳から素敵な笑顔を向けてくれることだろう。

ドンと掘れ 夕張娘！

\*

本稿は、夕張出身で北海道開発局OBの内川准一氏とその知己の方々のお力添えをいただきまとめることができました。この場を借りてお礼申し上げます。

- 1) 最も古い歌声喫茶は、三島由紀夫も通っていたという新宿の「どん底」(レストランとして現存)で1951年、「灯」は1954年開業。
- 2) 「厚生」とは、当時のレクリエーションの訳語。体操、競技なども含む活動はドイツ労働者党の取組がモデルで「厚生運動」と言われた。
- 3) くくりあご=括り顎 肉付きが良く二重になった顎。政府の産業政策もあって炭鉱は豊かだった。
- 4) 先山=さきやまとは坑道の先頭で採掘指揮する熟練鉱員。
- 5) 道内では太平洋炭鉱の佐藤広志が有名。本稿で用いた「ドンと掘れ黒ダイヤ」は、1948年、北海タイムス(休刊)の前身新聞社が募集した石炭増産の歌の当選作。歌志内の炭鉱マンが作り、あの中山晋平が作曲して、全国放送された。
- 6) ハ長調のドレミは1、2、3。この歌はト長調なのでソラシが1、2、3。0は休符、下線無しは4分音符、一本線は8分音符など
- 7) 筑豊の炭坑節の名は「炭坑節」。福岡県田川市の三井田川炭鉱が発祥の地だが、一部のレコードの歌詞などから三池炭坑節として広まったとされる。
- 8) 「北海炭坑節」の元歌は「ベッコ節」。ベッコは太平側東北地方における女性器の俗称。歌詞も多くが卑猥だった。青年歌集では北海炭坑節以外の2曲が第2篇に収録されている。
- 9) 1948年に日本青年共産同盟文化部が発行した楽譜では、「夕張娘」は今も多くの人が知っている「カチューシャ」とセットになっている。
- 10) 第1回紅白歌合戦(1951.1.3 新年3日の開催)では紅白各組7曲だけの内、東西の炭坑節(三池と常磐)が対戦した。これは、1956.12の第7回でも再現されている。



1948～50年発行の産業  
図案切手「炭鉱夫」



北海道独自の文化遺産、「子供盆おどり唄」(本誌2023年1月号)がCD化されました。今年の盆踊りに是非どうぞ。

## 蛙と雷神の妻になった娘

アイヌ民族の口承文芸の一つに、カムイユカラなどと呼ばれる、神様を主人公とする物語(神謡)があります。神謡の主人公とな



佐賀 彩美 (さが あやみ)

アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モントレー国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モントレー校)通訳翻訳学科修士課程修了。北海道大学大学院農学院農学専攻博士後期課程修了。全国通訳案内士。

る神々の多くは、<sup>ひぐま</sup>熊や<sup>かえる</sup>キツネ、蛙やカラスなどなど自然界に生息する生き物たちです。神様は人間の言葉はわかりませんが、節をつけて語ると理解するのだそうです。ですから、カムイユカラは必ず節つきで語られます。語り手により節のつけかたやリズムは物語ごとに異なります。これらの節つきの語り物は、もともと神々に奉納するもので、節なしのものは、人間に語って聞かせるものといわれます。

カムイユカラを世界で初めて文字化し、日本語訳をつけ『アイヌ神謡集』として出版したのは知里幸恵さんです。昨年ご紹介しましたが、アイヌ神謡集のなかに蛙の神様の話「蛙が自らを歌った謡」が登場します。この話では、姿は人間でも実は神であるオキクルミが、炉端で彫刻している最中に1匹の蛙が悪ふざけをしたため、ついにはオキクルミにマキの燃えさしを投げつけられて死んでしまいます。しかし、身体は滅びても魂は無くならないのがアイヌの死生観です。自分の<sup>むくろ</sup>骸の耳と耳の間に座って(死んだ生き物の靈魂は骸の耳と耳の間に鎮座していると信じられている)、自身の無様な死にざまをみた蛙の神が、偉い神様に対して悪ふざけなどするのではなかったと深く悔やんだ、というのが落としどころです。

カムイユカラでは、繰り返される折節があり、それで主人公が誰なのかを連想させる仕掛けになっています。この話ではトーロロハンロク、ハンロク(to-沼 or-の中のoro-所にhan-音合わせの挿入音rok-座っている、鎮座している)という節が蛙を連想させます。道東に伝承された「雷神の妻になった娘」の神謡にも蛙が登場します。この娘は兄と姉と三人で暮らしてい

ました。食料は兄が海や山で調達し、姉が家事一切をしてくれたため、末娘は着物の刺繍ばかりして過ごしていました。竿に何段にもかけ

られた娘の作った着物は、赤、緑、黄色などの刺繍が囲炉裏の炎に照らされて虹が立っているようにみえました。とある日、村の下手で大きな雷の音がし、上手でもまたドスン、ドスンという雷の音がし、蛙が耳を塞ぎたいほど煩く鳴くので、娘は外に出てみました。外には大きな池がありましたが、その池の表面を無数の蛙が埋め尽くし、鳴き続けていました。娘が蛙を捻り潰そうとしたところ気を失い、気がつくと天上界の雷神のところにいました。この話では、ケケタトゥーヌケ(keketa-さあさあ tununke-と鳴り響く)の折節が繰り返され、娘を家から誘い出した蛙の神の鳴き声が響き渡っていることを示唆しています。雷神が言うには、花嫁候補を探していて、村の下手に大変な美人がいる。また上手のほうにもやはり大変な美人がいると聞いて行って見たが、どちらも手や口の入れ墨が不十分だったので、その中間にいた娘を嫁にすることにして連れてきたということでした。雷神も親族も娘を大切にしてくれたので、娘はそのまま雷神の妻として天上界で幸せに暮らしたといえます。

アイヌ社会では、入れ墨を入れずにいると死んでから<sup>のこざり</sup>鋸で入れられる、という話が伝承されていたほど大変重要な意味を持っていて、入れない人は当時の年配者の非難の対象となることもありました。現代日本とは正反対の扱いです。

藤村久和先生が昨年3月末に急逝されてからもう1年が過ぎました。一昨年3月、先生に「アイヌ神謡集」の講演をしていただいたとき、先生が謡われたカムイユカラの名調子に、参加者がトーロロハンロク、ハンロクと楽しく声を合わせたことが思い出されます。

.....

\*本稿は、元北日本文化研究所代表であった藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施してきたアイヌ文化勉強会の内容を、筆者が取りまとめたものを、藤村先生に長年師事されていた花輪陽平氏に校閲いただいたものです。

藤村 久和 氏 (1940-2025) 元北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長  
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等)を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践してきた。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『アイヌのごはん』(監修、デーリイマン社、2019年)、『平成20~令和6年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~16』(北海道教育委員会、2008~2025年)等。



## 一人ひとりの手で 自然の恵みを受けて有機農業を

小田 大介さん (おだ だいすけ)  
 合同会社自然農業社 代表

農山漁村における地域の活性化や、個性的で魅力ある地域づくりの優れた活動を紹介するシリーズ。

今回は「わが村は美しくー北海道」運動第10回コンクールで奨励賞を受賞した「合同会社自然農業社」代表の小田大介さんにお話を伺いました。

### 《農業と福祉の出会い》

社警町<sup>そうべつ</sup>は北海道の南西部に位置し、洞爺湖、有珠山、昭和新山など雄大な自然に囲まれ、温泉など豊富な天然資源に恵まれた町です。基幹産業は農業と観光業になります。

小田さんは東京出身で、元は海上保安庁で勤務していました。最初の赴任先が網走で、休日とかにやっていた家庭菜園が楽しみながらできて、今思えばこのことが農業をやりながら北海道に住んでみたいと思うひとつのきっかけになったそうです。どんどん農業をやりたいという気持ちが強くなり、海上保安庁を辞め、富良野町、伊達市と農業研修を2年間受け、農業について勉強をしました。当時、子どもがアトピー性皮膚炎になったこともあり、農業をやるなら有機農業に取り組みたいと考え、その時に農業法人「たつかーむ」に就職しました。そこは有機農業はもちろん、障がいのある人たちと一緒に仕事をする職場で、初めて福祉に携わることになります。いずれは独立したいと考え、2015年に畑部門として引き継ぐ形で「合同会



大豆の袋詰め作業

社自然農業社」就労継続支援A型事業所として独立しました。現在約30名の在籍（スタッフ4名、利用者26名）の内、1日10～15名で作業をしています。

北海道での農業は通年雇用が難しいですが、加工品として切り干し大根や豆類の選別など冬でも作業ができる環境を提供して雇用形態を確立し、それぞれの個性に合った作業をやることで、障がいがある方でも無理なく働くことができます。障がい者の自立を支援する手助けができるのが農業だと改めて思い、小田さん自身もそして利用者も、お互いやりがいを感じながら作業をしています。

### 《自然を活かした有機農業》

主に、大豆・黒豆・あずき、ズッキーニ、にんにくなどを栽培し、大豆の8割は本州からの注文で出荷されます。とても美味<sup>おい</sup>しいと好評です。

有機農業は土づくりから始まります。自然との調和を大切にして、化学肥料や農薬に頼らず、そこに生息するさまざまな生き物と共生しながら、2年以上かけて環境を整えます。近年、気候変動が激しいため、作付けの時期をずらしたり、気候に合ったやり方を考えて作業をしています。とても手間ひまがかかる仕事ですが、作物が育っていく過程が解るのが何よりも楽しいです。これからもみんなで助け合いながら、安心・安全・美味しい農作物を作っていきますとお話ししてくださいました。今年は、露地栽培でのオクラづくり、サツマイモの干しいもづくりに挑戦！



有機大豆

※当協会ホームページ、「わが村は美しくー北海道」運動第1～9回受賞団体の活動概要をまとめた冊子『生産空間の活性化に資する地域事例集』をご覧ください。



## お知らせ

### ✎ 研究所だより ✎

観光は「平和産業」と呼ばれます。戦争や紛争、外交問題、自然災害、感染症の流行といった非常事態が起これば、人々は安心して旅を楽しむことができず、観光は一気に停滞します。その意味で、コロナ禍を乗り越えた現在は観光を前向きに語ることできる、比較的平和な時代と言えます。実際、訪日外国人観光客は増加を続け、特に消費額の増加は、地域経済に大きな効果をもたらし、観光が重要な基幹産業であることを改めて示してくれています。一方で、観光客の急増により、交通混雑や生活圏への影響など、オーバーツーリズムの課題を実感する場面が増えてきたのも事実です。観光による恩恵と、地域住民の暮らしとの調和をどのように図るのかは、今後の北海道観光にとって避けて通れないテーマと言えます。

現在、外国人観光客の目に北海道は「割安」で魅力的な目的地として映っていると感じます。その背景には円安があります。かつて1ドル100円前後だった為替レートは現在150~160円くらいとなり、日本の価格が上昇しても、外貨ベースでは割高とは感じられないのが実態です。加えて、日本の物価は欧米と比べてかなり低く、食や自然に恵まれ、安全で清潔な観光地である北海道が人気を集めるのは自然な流れと言えます。しかし、この追い風が永遠に続く保証はありません。為替や物価は大きく変動します。だからこそ今、価格や人数だけに依存しない、北海道ならではの価値を向上させ、地域住民の暮らしと調和した持続可能な観光地づくりを進めていくことが必要だと思えます。(黒田)

※本稿は昨今のイラン情勢の変化以前に執筆したものです。

### 国営滝野すずらん丘陵公園

5月9日(土)~5月17日(日)

#### シラネアオイと春の野の花まつり

「山野草の女王」と呼ばれるシラネアオイや、エンレイソウにフクジュソウなどの春の森を彩る花々が咲いてきます。なかでも1,000株を超えるシラネアオイは圧巻です!期間中はガイドツアーも開催予定です。

- 参加費 無料(入園料・駐車料金は別途)
- 場所 滝野の森ゾーン・西エリア
- 時間 開園時間内(9:00~17:00)

5月16日(土)~5月31日(日)

#### チューリップ・すずらんフェスタ

120品種、約23万球のチューリップが咲き誇ります。チューリップは品種数の多さ、カントリーガーデン「花のまきば」に広がる広大な景色を、すずらんは可憐な姿や香りをお楽しみください。

- 参加費 無料(入園料・駐車料金は別途)
- 場所 カントリーガーデン周辺
- 時間 開園時間内(9:00~17:00)

5月23日(土)・24日(日)

#### チューリップを上から見てみよう!

普段は入れない、中央口の屋上の特別な景色からチューリップを見てみよう!

- 参加費 無料(入園料・駐車料金は別途)
- 場所 中央口A棟屋上
- 定員 なし(屋上の滞在定員は15名程度)
- 時間 10:00~15:00(最終入場14:50)

※詳細は当公園ホームページ(URL: <https://www.takinopark.com/>)をご覧ください。滝野公園案内所(011-592-3333)までお問い合わせください。



●「開発こうほう」へご意見・ご感想をお寄せください。

(一財)北海道開発協会広報研修出版部

〒001-0011

札幌市北区北11条西2丁目セントラル札幌北ビル

電話 011(709)5212

e-mail:pr@hkk.or.jp

●「開発こうほう」は、北海道開発協会のホームページでもご覧いただけます。

●(一財)北海道開発協会では、賛助会員を募集しています。詳しくは、ホームページをご覧ください。

開発こうほう 第753号 令和8年5月1日発行

発行 (一財)北海道開発協会

印刷 (株)須田製版 不許複製

<https://www.hkk.or.jp/>



## 業務内容

- 土木工事全般
- 道路維持管理業務
- TVカメラ調査・管更生
- 除排雪業務
- 排水構造物清掃
- 産廃物収集運搬及び中間処理

 HRM HOLDINGS GROUP

# HRM 北海道ロードメンテナンス株式会社

HOKKAIDO ROAD MAINTENANCE

本社	〒060-0031	札幌市中央区北1条東12丁目22番地48	TEL (011) 241-1692	FAX (011) 241-7774
真駒内事業所	〒005-0861	札幌市南区真駒内52番地	TEL (011) 592-6512	FAX (011) 594-2258
発寒事業所	〒063-0835	札幌市西区発寒15条12丁目1-25	TEL (011) 665-3259	FAX (011) 665-8447
北見事業所	〒099-0878	北見市東相内町110番17	TEL (0157) 36-9811	FAX (0157) 36-9812



[h-rm.co.jp/](http://h-rm.co.jp/)



## 各種施工管理技術検定試験 販売図書のご案内



土木施工管理技術テキスト  
改訂第4版 (2冊併入)

**7,920円 (税込)**

1・2級共通のテキスト



1級土木施工管理 第一次  
検定 問題解説集 2026年版

**4,290円 (税込)**

過去7年分 (R7-R1) の過去問解説



1級建築施工管理 第一次  
検定 問題解説集 2026年版

**4,510円 (税込)**

過去8年分 (R7-H30) の過去問解説



1級電気工事施工管理 第一次  
検定 問題解説集 2026年版

**4,290円 (税込)**

過去8年分 (R7-H30) の過去問解説

販売窓口 (8:30~17:00 土日祝日を除く)

お問い合わせ先

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目セントラル札幌北ビル

一般財団法人北海道開発協会 広報研修出版部

TEL:011-709-5212 FAX:011-709-5225 <https://www.hkk.or.jp/syuppan/>



【発行元】

施工管理技術検定対策ひとすじ半世紀  
一般財団法人 地域開発研究所

TEL 03-3235-3601

FAX 03-3235-3612

